第四章

保護居留地域への強制移住

1854--1861

1854 年の 5 月 30 日に、政府による意図的な奴隷制度の公布と、西部への鉄道敷設の 10 年間が過ぎたあと、カンザス―ネブラスカ条例が法律化され、そこで、カンザスとネブラスカの領地が明確となった。入植者達にとっては、政治家たちが法案の詳細について見当をしたはいたものの、依然としてミズーリ川を越えていくことには大変な困難を伴っていた。多くの家族が、新しい大地が開放されることを期待して、長い旅をして来たのだった。アイオア州やミズーリの州の西の州境に膨れ上がった入植者達の社会では、土地に対するインディアン達の所有権を直ちに消滅させ、その土地をアメリカ人の入植地として解放してほしいとの嘆願が持ち上がってきた。ネブラスカでは、入植者たちの勢いづく街々で、毎土曜日の夜には舞踏会が盛んに催され、ネブラスカ新聞が、1853 年という早い時期にすでに発行され、先走る入植者達は、新しい領地に臨時政府すら樹立して、統治官を選出していた。[1]

新しいネブラスカの姿と、そして、インディアン達に対する法律上の地位についての新しい考え方が、こうした熱狂的な開拓地域の雰囲気のなかででっち上げられていった。
かっては、地図の上に巨大なアメリカの不毛地帯として烙印を押されていた地域が、いまや、開拓広報誌のなかで、“素晴らしい天地・・・・そこは、白人達のものになるはずの土地で、やがては、バラ園のようになるところだ”と、報道されていた。[2] 読者達は、ネブラスカは木々に溢れ(まさしく、それは誇張された表現で)、水が豊富にあり (こうした期待は直ぐに長々続く旱魃により一掃されてしまった)、そして、肥沃な土地 (このことについては、だれも否定はできなかった)であると、聞かされていた。彼らは、さらに、そこには、いくらでもとれる石炭、鉛、そして、そのほかの鉱物も豊富であると、誤って聞かされていた。こうしたことに加え、西部アイオワ州では好きな土地がすでに 1 ｴｰｶｰ当たり 10 ドルで販売されているというような、まさに魅力的な土地が安いという見通しがあった。

さらに、ネブラスカのインディアン達は、明らかに、土地に対する法律上の主張を何もしなかった：“われわれは、政府の土地に移り住んで来た白人に対して、なんら有効な、そして、根拠のある対抗手段を見ることは出来ない。”と、1853 年に St. Joseph Gazette が公然と発表していた。[3] 留まるところを知らない拡張主義者の Thomas Hart Benton ミズーリ州上院議員により提出された論拠は、ポウニー族は、彼等が 1833 年の協約に合意したときにネブラスカの南部の地域に対する権利をすでに放棄したというものであった。以来、

このこうした土地は、移住をさせられたインディアン達が住むようなことは決してなかった。Benton は次のように理由付けしていた；そうした土地は、今やアメリカ人に都合の良いように役立てるべきである。このことは、勿論、1833 年の協約、ポウニー族、オトエ―ミズーリ族、カンザ族、そして、移住をして来たそのほかのインディアン達がこの領域をそれまでと同じように、それ以後もずっと、狩をする土地として使用することを認めたこの協約の条項を無視したものであった。

新しくインディアン関連事項の統括官に任命された George W. Manypenny は、こうした狩猟権は必ずしも放棄されたものではなく、いまだ、ここは公共の土地であるとは認識していなかった。彼が言っているのは、もともとのこの土地の販売というのは、アメリカ人に対してではなく、代替地としてここを提供されたインディアン達を収容するために行われたものであった。着任すると、最初の仕事のひとつとして、Manypenny は、1853 年の秋に西部の州境を訪問し、いろいろな部族と会合を持った。(こうした部族には、オマハ族、オトエ―ミズーリ族は含まれていたが、ポンカ族やポウニー族は含まれていなかった) そこで、彼は、インディアン達が、破れかぶれの苦境の状態にあり、そして、今にも直ぐに襲撃をしてくることを警告しているような状況にあることを知った。沢山の入植者達は、この肥沃な土地の所有を主張するためにミズーリ川を越えてさえいた。Manypenny は、ネブラスカに入植していたアメリカ人たちの勢いを緩めようとは思わなかったし、また、事実、彼は、この地域は“速やかに、開放される”であろうし、“最も公平な形で”売り渡されるということを支持していたが、彼は、インディアン達の所有権を失効させる適当な方法を模索していた。[4] インディアン達は、当初、自分たちの居住地を売り払った土地で、そこを動かずにいたが、Mnaypenny は、彼らに対して、もはやアメリカ人のこの地に流れ込んでくる潮流は止めることが出来ないし、インディアン達も考え方を変えていかなくてならないと説得した。立派なことに、Manypenny は、提案された協約の夫々の項目の内容を検討し、そして、それを反映させる時期に関するインディアン達の要望に同意をした。オマハ族、オトエ―ミズーリ族、そして、後にはポンカ族から選ばれた派遣団が、さらに詳しい議論をするために Washington D.C.を訪問することになり、そして、協約が結ばれたあと、ネブラスカに居住している四つのインディアン部族すべてに対し、彼等の保護居留区への移住のために一年間が与えられた。こうして、拡張主義者達は、一時的に、その入口の一角に留まることになり、Manypenny は、西部州境に住む人たちの間では酷評されることとなった。

こうした入植地の建設が、1853 年、そして、1854 年の前半に次々に進む一方で、ネブラスカのインディアン達の飢餓と、ブルーレ族、ならびに、オガラーラ・ダコタ族による襲撃で破壊されるということが相変わらず続いていた。彼等は、年金が入らなかったし、また、そのほかの如何なる支援も得ることができなかった。彼等に残された唯一の財産は、彼等の持っている土地だけであった。アメリカ人の急激な増大で瀬戸際に追い込まれながら、彼等は、今や、自分たち自身を貧困から解放させるためにだけ、自分たちの持ってい

る領地を売らざるを得なくなっていた。一連の協約のなかで、引き続き、1854 年の３月に、オトエ―ミズーリ族とオマハ族とのものを初めとして、1857 年と 1858 年には、夫々、ポウニー族と、ポンカ族との協約が結ばれ、ネブラスカのインディアン達は、自分たちの年金と、Manypenny の保護居留地での素晴らしい未来があるという約束と交換するために、彼等の残された土地のかなりの部分を売り払ってしまった。とりわけ、オトエ―ミズーリ族は、ネブラスカの南東部に残されていた彼らの土地を売ってしまい、カンザスとの州境挟んだ Big Blue River の河岸の 162,000 ｴｰｶｰほどの保護居留地に新しく移り住んで行った；オマハ族は、ネブラスカの北東部の土地を売り払い、そして、Black Hills にある 302,000 ｴｰｶｰの保護居留区に移り住んだ；また、ポウニー族は、Loup 川の河岸に僅か、288,000 ｴｰｶｰの保護居留区を残して、Platte 川の北に広がる彼等に残されていた土地を売ってしまった；そして、ポンカ族は、Niobrara 川の北の河口から、現在のサウス・ダコタに広がる楔形をした土地を売り払い、Niobrara 川と Ponca Creek に挟まれた 58,000 ｴｰｶｰの保護居留区に移動する協約を結んだ。(fig. 13)

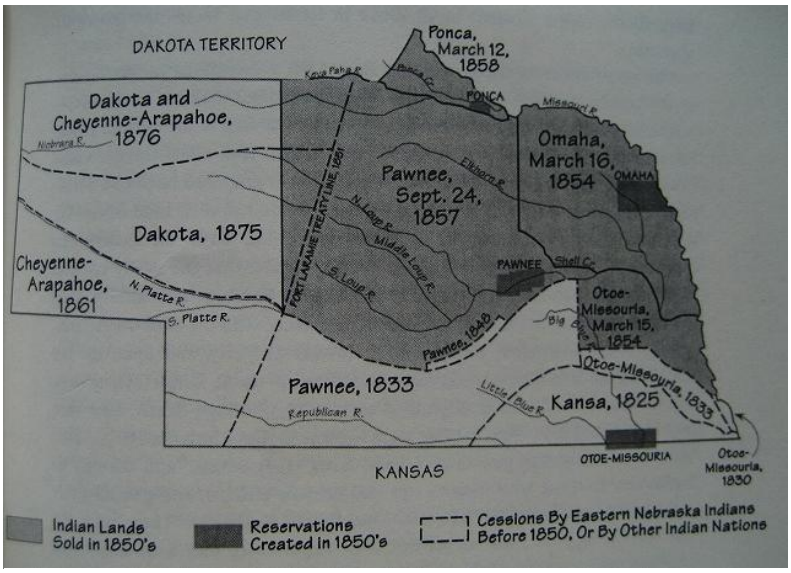

Fig.13　18 世紀に実施された土地の売却

保護居留地区政策と開拓者たち:理想と現実

保護居留地区が、究極の状態、すなわち、割り当てられた土地やアメリカ人により入植された残された土地に住んでいるインディアン達を同化された状態にすること、に到達する手段としてのみ意図されていたことは明確であった。Manypenny 以来のインディアン関連事項の統括官たちは、それ以前の二十年間に為された政策を批判的な目で反省していた：彼らは、インディアン達は、あまりにも沢山の土地を所有した状態で放置され、そして、(信じ難いことであるが ） 彼らは彼等の土地の譲渡(よく言われていたのは、そのために彼等は怠け者になった ）の代価としてあまりにも沢山の金を与えられ、そして、それ以後もずっと、伝統的な、共同社会的な生活をすることが許されたのだと結論していた。さらに、Manypenny が、1854 年に報告しているように、もはや、彼等を移動される土地は何処にもなかった；彼等の運命は、適当なところで解決されなければならないような状態

であった。[5]

そのようなことから、1850 年代の見直された政策が、長い間、進められてきた同化の目的から外れてしまったが、しかし、それはもっと内容の濃い、そして、以前よりも地域の実情により注目した形で、実施されていった。統括官の Albert Greenwood は、1859 年に保護居留区をうまく統合する政策をまとめた：“現在の政府の政策は、財産処分権の効力を除いた、単純不動産権の所有に伴うあらゆる権利とともに、部族の夫々の個々人に固有に割り当てられた小さな区画からなる明確に外界との境界線を規定された、部族の小さな保護居留区のなかにインディアン達を閉じ込めるというものである。”[6]

同じような認識―すなわち、1850 年代に作り出されたインディアンの保護居留区の大きさは、インディアンがその割り当てを取得するときには、必然的に減らそうというもの―が、統治官や代理人の報告のなかに、開拓団の広報のなかに見られるものと同じような形で記述されていた。たとえば、1851 年に報告書をまとめた統治官の Mitchell は、こんな疑問を投げかけていた。割り当てられたネブラスカの領地に住んでいる“インディアン達には何がなされなくてはいけないのか？”　彼自身の答えは、家族の長に対して土地の一区画を与えることであり、こうして、入植者たちの“肥沃の農地”の“膨大な余分な土地を”、自由に使わせるようにするというものであった。彼の後任の Alfred Cuming は、1857 年の彼の報告書のなかで、新しく策定されたネブラスカの保護居留区は、“必ずしも、十分な広さではない”と指摘していた。彼の進言は、ポンカ族とオマハ族を、そして、ポウニー族とオトエ―ミズーリ族とを一緒にして、インディアン達を小さな彼等の私有の土地に住まわせ、そして、アメリカ人の農場経営者のために残された土地を解放するというものであった。St. Joseph Gazette 紙の編集長は、1853 年という早い時期に、明らかに彼等の興味というのは、インディアン達のためというよりアメリカ人のために、より沢山持たらされる利益と言うものにあったのだが、インディアン達への土地の割り当ての根拠というものを大体的に報道していた：“政府に対して、よい農場の土地の提供を保証し”さらに、彼らは、“居留地に留まり、そして、アメリカ市民になろうというインディアン達には、畜産用の器具類を、そして、彼らの子供たちや若者には、何時までも、優れた産業技術教育を施すように”、求めようと述べていた。こうした方針に従わないものは、彼等が改心をするまで、さらに西部の奥地に追放するか、もしくは、彼は、消滅するしかない、と論説していた。[7]

部族を統合するという保護居留区政策は、明らかに、ネブラスカインディアン達と合意した協約の中の項目として公表されていた。[8]　ところが、夫々の部族は、特異的な状況にあったので、それらの四つの協約の内容には重要な違いがあった。しかし、こうした違いは、全体の統一性からすれば、極々僅かのものであった。土地の割り当ての条項は、大統領が、“彼の自由裁量でかってに”保護居留区を総括し、その土地を自分たちの“永久の居住地”とする意思を持ったインディアン達に割り当てる土地を“非常に多く”する権利を持っているという条項が規定されていた、オトエ―ミズーリ族、そして、オマハ族との協約はその冴えたるものであった。土地の割り当ての量は、その家族の大きさに比例して

いた：一区画(80ｴｰｶｰ)の 1/8 が 21 歳以上の各人に与えられた；家族が二人であれば、一区画の 1/4 といった具合で、6 から 10 人の家族であれば、それに応じて、時に一区画の全てとか、或いは、それ以上の土地が与えられた。ポウニー族とポンカ族との協約のなかでは、明確な記述がされていなかったが、土地を割り当てに応じて分割していくということが望ましいことは、繰り返し述べられていた。

こうした協約は、インディアン達が“定住を余儀なくされ、文明化され、そして、活気を取り戻していく”(もう一度、Manypenny の言葉を使うなら)であろう、その方法についても特定していた。[9]　協約の条項のなかには、同じようなインディアン達の同化政策を30年前に推進していたJohn Doughertyにとっても、なんら腑に落ちないものはなかった。夫々のグループは、彼等の土地に対する支払いとしての累進年金、そして、インディアン達が、理論的に、アメリカ人的な自給自足に転換していく過程で、次第に少なくなっていく年間の支援金というものが与えられた。夫々の年金の大きさは、彼らが譲渡した土地の広さに応じて大雑把に取り決められていたが、しかし、それは、支援を必要としている実際の人たちの数を殆ど反映していなかった。(table. 6)

統治官の Alexander Robinson は、彼が、年金の量は、それがインディアン達を“彼等にとってもっと重要な事柄までも政府に頼る”ようにしている程だと異論を唱えているように、1860 年にこのことを何度も繰り返していた。

このことが、大統領が、“もし、あるとするなら”、支払いの何某かは、現金で支給し、残りは、インディアン達の教育や、農業技術の指導、そのほか、“彼等の市民化を推進するために計画された”そのほかの手立てを通して、彼等の“道徳の改善”をするために使おうと決断させることとなった。年金は、略奪行為に対しては、そして、子供を学校に行かせないようなときの罰として、さらには、アルコールを持ち込んだり、或いは、飲酒したときの罰則として、支払いが保留されていたはずである。いずれの協約にも、年金支払い、もしくは、個別の条項のなかに、先生、農民、そして、鍛冶屋に対する学校教育費、農業用器具、そのほかの日用器具、粉引き器具、そして、給料というものが、取り決められていた。夫々の部族は、自分たちの、彼等を守ってくれることに同意した合衆国に対する依存の程度を良く知っていた。こういうことで、インディアン達は開拓農民達を邪魔することは許されることではないという率直な認識のもとで、合衆国は、保護居留区の中に砦を築いたり、道路を敷設したりする権利を与えられた。

連邦政府のインディアン政策の主要な最終目標は、明らかに首尾一貫して残っていたが、実行された精神は、変化しつつある状態の人たちに対応して非常に違っていた。多くの行政官達は、―　多くの統治官や、職員、そして、その職員の使用人と同じように―　自分たちの仕事を他の人たちよりも、より高い道徳的な責任感覚を持って仕事に当たっていた。George Manypenny は、Thomas McKenney の路線に沿った人道主義者であった。彼の主要な仕事は、彼の“被後見人たち”が、彼らの土地を保有するなかで彼らの安全を確保し、そして、彼等を食いものにしようと虎視眈々としている取引商やそのほかの入植者達から

守ることにより、インディアン達が義務的に変化を遂行している間、彼らを守るというものであった。一方、John Denver、彼は 1857 年、そして、1858—59 年にかけて行政官と

Table 6　The 1850' Treaties

Indian Group	*Treaty*	*Acreage*	*Annuity Payment*	*Other Payment*	*Total Payment*	*Payment Per Acre*	*Payment Per Capita*
Otoe_ Missouria	Mar. 15, 1854	1,087,893	$20,000 for 3 years $13,000 for 10 years $9,000 for 15 years $5,000 for 12 years	$20,000 for resettlement Payment for a saw and grist mill and blacksmith's shop, and the services of a miller, blacksmith and farmer for 10 years	$463,424	42.6 cents	$777
Omaha	Mar. 16, 1854	4,983,365	$40,000 for 3 years $30,000 for 10 years $20,000 for 15 years $10,000 for 12 years	$41,000 for resettlement Payment for a saw and grist mill and blacksmith's shop, and the services of a miller, blacksmith and farmer for 10 years	$881,000	17.8 cents	$1,125
Pawnee	Sept,24, 1857	9,878,000	$40,000 for 5 years $30,000 a year in perpetuity	$5,000 for each of two schools, $500 a year for iron, steel, etc., $1,200 a year for farming wquipment, all the above for as long as the president decrees. $750 for blacksmith tools, $500 for blacksmith shops, $6,000 for steam millk, services of farmer, two blacksmiths, miller, and engineer.	$2,144,610	21,7 cents	$536

Table 6　Continued

Indian Group	*Treaty*	*Acreage*	*Annuity Payment*	*Other Payment*	*Total Payment*	*Payment Per Acre*	*Payment Per Capita*
Ponca	Mar,12, 1858	2,334,000	$12,000 for 5 years $10,000 for 10 years $8,000 for 15 years	$20,000 for resettlement $5,000 for 10 years for school $10,000 for mill and workshos $7,500 for 10 years for agricultural aid $20,000 to pay off past depredations	$455,000	19.5 cents	$650

Soruces: Kappler, *Indian Treaties*, wol. 2. 608-14,764;7,772-75,and Wishart, "Compensation for Dispossession,'Tabel 1. Acreage figures are estimates derived form primary sources and agreed upon in claims cases in the 1950s, 1960s, and 1970s. The Pawnee's perpetual annuity is counted only as the principal ($600,000)that was deposited on their behalf and yielded, at 5 percent interest, a continuous payment of $30,000 a year. Total payments in all cases include annuities and the various funds earmarked for schools, agricultural aid, and other aspects of the civilization program. Payment per capita is total compensation divided by population and should not be confused with individual cash payments which were given to each Indian as part of the annuities.

して任務していたが、その彼は、そうした忍耐力を持っていなかった。彼の主な目的は、開拓者達の勢力を拡大するためにインディアン達の土地を手に入れることであった。インディアン達に対する土地の割り当て政策は、迅速に処理されてゆき、その土地で働く意欲のないインディアン達は―“存在価値のない怠け者であり、浮浪者”― 大平原の西部に作られた植民地に送り込まれることになった。Denver 自身が、西部で手にしていた財産に含まれているものの中には、Nemaha Half-Breed Tract の中の土地も含めて、彼が業務を推し進めたやり方にまんざら関係なくもないものがあるであろう。[10]

1830 年代に合衆国のインディアン政策を疲弊させた本質的な問題は、1850 年代になっても何一つ解決されていなかった。1850 年代に結ばれた協約では、ネブラスカのインディアン達の土地の売却に対して、それ以前の取り扱いよりも、より沢山の支払いをしていた。この問題に対しては、少なくとも四つの理由が考えられ、まずその第一は、直ぐ手近にある開拓者達の権利と、1841 年の、一ｴｰｶｰ辺り$1.25 で販売するという Preemption 条項のもとでの土地の売却とともに、政府は、インディアン達の売却に対するあらやる経費を直ちに払い戻すことが出来たこと、二番目の理由は、ネブラスカのインディアン達は、狩猟によって自分たちの生活をもはや維持することは出来なくなっていたこと、その結果、全体的な惨事を防ぎ、そして、合衆国政府が以前から主張していた人道主義的な政策を保護するためにより沢山の支払いがなされたこと、そして、三番目は、文化変容の増大という

ものが、以前より、より沢山の基金を必要としたこと。少なくとも(或いは、理論的にもそのように進んだ) インディアン達が連邦政府の支援無しに独立できるまでは。最後に、最初の土地の売却が始まって以来、彼等の 20 年間の経験で、ネブラスカのインディアン達は、彼らの土地がアメリカ人たちにとって価値のあるものであるということに熟知するようになり、より公正な支払いを求めて精力的に要求するようになっていたことである。

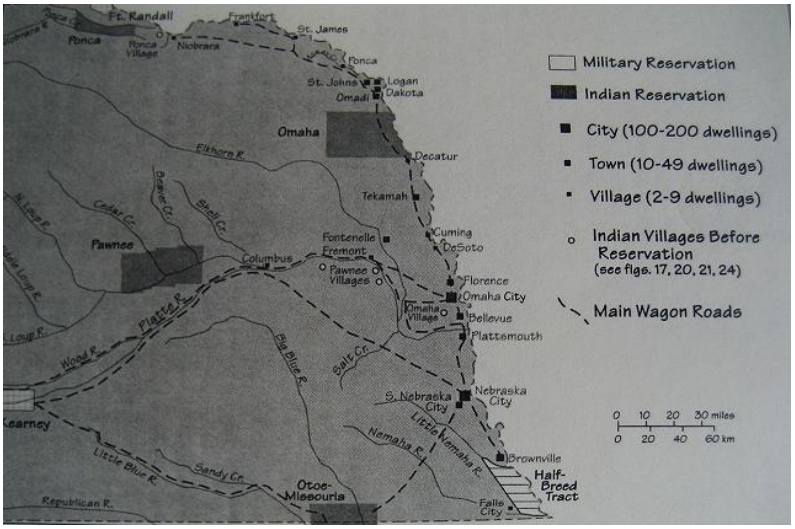

Fig 14　1860 年ごろのネブラスカ東部

にもかかわらず、ｴｰｶｰ辺り、或いは、一区画辺りの支払いは、依然として惨めなほど低く、土地は、市場の公正な価格よりもずっと低い価格でアメリカ人の手に渡っていた。なおも、インディアン達をアメリカ人の社会に組み入れ、かれらがこの急激な転換を進める間はこれを支援するという形でたてられた政策では、適当な基金は準備されていなかった。このことに加え、政策の失敗と、インディアン達のお金の管理における紛れもない破綻の問題、そして、保護居留区に関する崇高な考え方が、必要な約束により後ろだてされていないということが明らかになった。結局、数百年以上にわたりはぐくまれた文化的な信仰が、一世代、もしくは、二世代にもわたって取り残されるに違いないという異常な憶測が残こることとなった。殆どのネブラスカのインディアン達は、いやいやながらも、伝統的な信仰と、習慣を維持させられるような形になった。その一方で、彼等の保護居留区は、殆どがインディアン達が自分たちの新しい世界に依然として居残っていると不愉快に思っている入植者達に取り囲まれていたのであった。

1854 年にネブラスカに入植してきた人たちは、主として、インディアン達が自分たちと張り合うと思っていたような自作農の人たちではなかったことは、決して、小さな皮肉ではない。勿論、誠実な農業入植者達もいたが、しかし、流動的な開拓地の経済を利用して富を得ようという、大なり小なりの投機家がもっと沢山居たのだった。“机上の町”を創設しようという激しい動き、急激な田舎と街の人口の変革(1859 年のコロラドの金鉱山への集団移住も含めて) 、1860 年までに開発されたごく僅かな土地、そして、あらゆる機会での大地を管理する法律の極僅かの見直し、こうしたものは、前時代のネブラスカのインディアン達の殆どが、大地には根付いてはいないが、お金、とりわけ財産を手に入れることに執着していると指摘している。加えて、Sheldon、彼は 19 世紀の終わりから 20 世紀の

はじめにかけてのネブラスカの歴史家であったが、非常に多くの土地が、Preemption 条項のもとで売却され、そして、大部分が軍の報酬土地支払い命令書(これは、1862 年の Homestead 条項の前のネブラスカ領域の中に譲渡された土地の殆ど全部をひっくるめたものであった)によって買収された土地が、最初に投機家たちに渡り、そのあと、初めて誠実な入植者達の手に渡った。[11] この土地に対する投機の規模は、次の世代には増加の一途を辿った。

1860 年までに、フェリーでミズーリ川を越えてネブラスカの領域に入植した、ないしは、St. Louis からの沢山のスチームボートに乗って上陸した、28,826 にも人たちが、オハイオから、そして、ニューヨーク、ペンシルバニア、インディアナ、イリノイ、さらには、アイオワから、移住の要請を受けて入植してきた。[12] ミズーリ川は大変な貢献をしたが、南の地方の人達は、カンザス州に行った。入植者達の約 1/4 は、外国、主としてドイツ、イギリス、そして、アイルランドといった国生まれの人達であった。あまりにも急激に入植たちの数が増え、政府の測量調査が間に合わなかったほどである。こうした、調査の済んでいない土地に入植するために特別の許可が授与され、後で、その権利を、一番近い測量の線にあわせるというようなことが行われた。

入植者達の 2/3 を満たす人たちが、オマハ・シティーから下流の西側の川岸に沿った街と競合するように、この地を選んで入植した。(fig. 14) 彼らはそこで、建設工事の仕事につき、会社に勤め、あるいは、現金を持っているときには、町が発展して価値が上がるようなくじに投機をした。当時のもっとも大きな町—オマハ・シティー、ネブラスカ・シティー、そして、ベルブーは、いずれの町も、1860 年当時、銀行、ホテル、倉庫会社、フェリー会社、そのほか、周辺の農家や、遠くに散らばっていた移住者たちにさまざまな品物を供給する沢山の店で働く人達で、1,000 人以上もの人口があった。農家は、ミズーリ川に注ぐ小さな、木々の生えた川に沿って延々と広がっていたが、しかし、流れのわかる川岸から 10 から 20 ﾏｲﾙ程度以内のところで、それぞれの入植者達は、あまり交通の便がよいという状態ではないが、しっかりと連絡を取り合っていた。沢山の田舎の入植者達は、簡単に先買権を売るために土地の占有登録をし、そのあと、法的な登録の規則を無視して、町で働くためにそれを売り出していた。こうした、休耕地の価値が急激に認められるようになった：1860 年までに、ネブラスカ・シティー近くの優れた農耕地は、ｴｰｶｰあたり $8.25 で販売されていた。[13] オマハから北の地域、かっての、フローレンス、テカマ、そして、ダカタールの小さな村には、入植者達が一杯になった。ダコタの活気のある町には、もっとも北に位置するフェリーの渡し場ができ、ここから、駅馬車が、ポンカや St. James、フランクフルトのドイツ人の入植地、そして、究極的には、辺地の最先端にある、Niobrara の村に向かって、幌馬車の通った道の跡を走り抜けていくようになった。1858 年に、Niobrara には、20 件もの家と、ホテル、そして、同じ名前の川の中州に育った大きな木を加工する製材所があった。

ミズーリ川から西に向かった入植の唯一重要な拡大は、Platte 川の北側の土手に沿った

ものであった。駅馬車の拠点と街道脇の牧場(ここの持ち主は、移住してきた人たちに、枯れ草と食料を法外な値段を吹っかけて、快適な暮らしをしていた) が、Fort Kearney やそれ以遠の町へと続く、良く整備された道に沿って、ちょうどビーズのように連なっていた。フリーモントやコロンバスは、開拓者達の村で、いずれも、だいたい 20 件ほどの家があり、沢山の家が建設中であった。Loup のフェリーを管理することで利益を得ていたコロンバスは、店や居酒屋が繁盛していた。Platte 川の南側は、交通の便が悪く、川の流れが深く切れ込んでいて、しかも、木が少なく、さらに、ほかの村から隔離状態になっておりインディアンの襲撃の恐れがあったので、開拓されずに残っていた。

ネブラスカのインディアン達に対する入植者の態度は、双方の集団に多様性があったので、さまざまであったが、一般的には、彼らはインディアンたちを軽蔑していた。彼らはインディアン達を、発展の過程の邪魔者として、近代化されていく世界の時代遅れになったものとして、そして、(何の原因の解析もなしに) かっては誇り高く、独立していたものが、国家の哀れな半端者となったと理解していた。特に彼らは、政府が、土地の売却に対して、もちろんこれを償う形のものであったが、福祉の形と考えて、年金を支払うことに憤慨をしていた。このような特異的な感情は、1857 年の経済のパニック(これは、極端な推論によりもたらされたものであるが、) により、多くの入植者たちが貧困に追い込まれてしまったので、ますますいらだっていった。入植者達は、インディアンたちのことと、そして、パニックにより開拓者に極わずかの現金しか回ってこないことを心配し、ポウニー族について、このような論説を、オマハ・シティーの Nebraskian 紙に発表した : “もし、政府がこうした肌の赤いいたずら熊たちからネブラスカの住民を守るつもりが無いなら、その時には、われわれは軍隊の出動を要請し、そうした部族の頭皮をはぎとってやりたい。”[14] この領地の権威者達は、インディアンの存在がネブラスカからの移住者の進路を変えていると信じていたので、彼らに対して、敵対的な態度をとっていた。

同様の感傷的思いが、土地を区画整理するためにしばしばインディアンの中に入っていった政府の調査官達によっても伝えられていた。たとえば、Augustus Ford Harvey は彼が、1858 年の秋に、Republican Valley を測量している時に随分ポウニー族から嫌がらせを受けた。インディアンに対して抱いていた彼の先入観は、この経験によって、ますます確固たるものになっていた。“私は、いつも、赤い肌をした連中にあまりにも気乗りのしない同情があるといつも考えていた。そして、このたびは、私のありとあらゆるこうして同情の最後のものを捨てることとなった。” Harvey の勧告というのは、“この地球上から彼らの最後の母親から生まれた息子を完全に消し去ること” であった。[15]

多分、当時ネブラスカに住んでいたほとんどの人たちは、インディアンたちを好ましく思わない気持ちは、Harvey ほど強くはなかったであろう ; あるもの達はむしろ同情的でさえあったが、これは、インディアンたちが考えていたほど脅威では無くなってから広まっていった感情であったようだ。しかし、依然として 1858 年当時、ポウニー族のいる場所のまわりに密集していた入植者達は、管理官の William Dennison によれば、“インディアン

たちよりももっと文明化されていなかった。”それは、まさしくそのとおりで、彼は、インディアンたちに年金が届くその直前にインディアンたちに対する沢山の略奪支払い請求がいつも持ち上がることを皮肉たっぷりに批判していた。[16]　オマハ族、ポンカ族、そして、オトエーミズーリ族たちも、やはり同様の経験をしていた。もと取引商であった Pierre Chouteau, Jr.　かれはネブラスカに入植した開拓者達のことを誰よりもよく知っていたのだが、その彼が、インディアン管理局に対して、こうした敵愾心に対する全面的な責任を持っているのは、インディアンたちではなく、辺地のアメリカ市民のほうであると報告していた。[17]　しかし、それは、少数意見であった：責任が、ネブラスカに住んでいるインディアンたちに来るときには、彼らに有利に働く好都合な同情や理解は、ほとんど無かった。

保護居留地への引越し
Blue 川の安らぎの場所

当初、オトエーミズーリ族は、彼らの保護居留区に住み着いたが、しかし、それは必ずしもすんなりとことが運んだわけではなかった。1854 年に Washington, D.C.での協定の代表団の帰還の次の年に、彼らは、Manypenny が述べているように、“ミズーリでの昔からやっている狩猟”を、しばしばやり続けていた。[18]　だいたいが、かれらは、Salt Creek と入植者達で急激ににぎやかになった Plattsmouth の町との間の Platte 川の南側の河岸に、ティビーや土作りの小屋の村を作って、そこに住んでいた。1855 年から、1856 年にかけて、この地を測量していた政府の調査隊のものが、Salt Creek と Platte 川が合流する地点の近くで、“つい最近、放棄されたばかりの”村の跡を発見していた。彼らは、この場所が、ポウニー族、彼らは、確かに 1855－56 年にかけて、このあたりにいたのだが、彼らのものであると考えたが、しかし、その村のある場所から考えて、この村は、間違いなくオトエーミズーリ族のものであったとされた。さらに、Platte 川の河口近くまで下り、調査隊は、そこで、“トウモロコシの茎と、マメの木”、そのほか、そこに居住していたものたちの証拠を見つけた。ちょうど、ネブラスカ・シティーの西の地域、そこには、“今でも沢山のテント小屋が建つ、インディアンたちにとって格好のキャンプの場所”があった。[19]　オトエーミズーリ族が彼らの保護居留区を離れる直前まで住んでいた最後の居住地の跡があった。彼らは、移住するために、丸々一年をかけて、彼らのものすべてを運び去ったが、それは、おそらく、彼らは、移住を完璧に終わるには、秋の収穫と冬の狩がどんなものになるかを知っておく必要があったからだろう。しかし、新しい保護居留区の正確な場所を認識するあらゆる面で、目に見えての困惑があり、それが後に結果として現れてきた。

1854 年の協約の第一項は、オトエーミズーリ族は Big Blue 川の河岸、幅 10 ﾏｲﾙ、そして、距離にして 25 ﾏｲﾙの保護居留区を保持することとなっていた。[20]　この提案された保護居留区の区域は、“インディアンたちが、島と呼んでいた場所”であること、さらには、譲渡された土地の西の境界線がいい加減なものであったことから、まことに漠然としたも

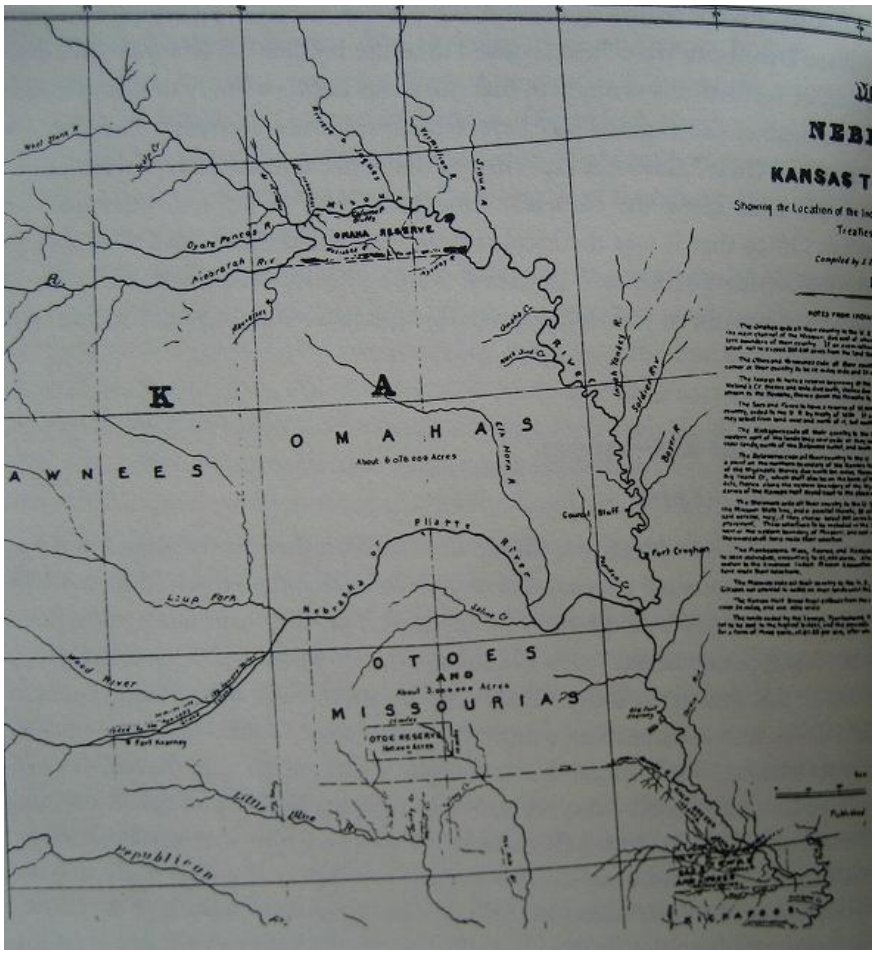

Fig. 15 1854 年のネブラスカとカンザス領域の一部についての Eastman の地図　General Map Files, National Archives, RG 75, Map 974

のであった。1854 年に、Seth Eastman 大尉によりインディアン局のために作成された地図には、保護居留区が、Big Blue 川の本流の近くに置かれていた(fig. 15) Manypenny は、その地図に、保護居留区は、“正しい”と注記して、承認印を押した。しかし、オトエーミズーリ族の方からすると、この地図は、保護居留区の全体的な広さということについては、確かに正しかっただけで ; その位置は、インディアンたちが住みたいと考えていた場所—カンザス州とネブラスカ州との州境をまたぐ Big Blue の河岸からは、40 ﾏｲﾙも北の地域であった。

1854 年の 10 月になっても事態は収まっていなかった。オトエーミズーリ族がカンザスとネブラスカの州境の提案された場所を訪れたときに、かれらは、その保護居留区のほとんど全域が、Big Blue 川の西側に位置しており、木々の見当たらないような場所であることを知った。代理人の George Hepner によれば、彼らは、Big Blue 川の西の地域では、ますます敵の襲撃にさらされるようになるとも考えていたようであった。[21] Hepner は、保護居留区を、もっと沢山の木々が手に入り、そして、インディアンたちが、“彼らの敵からの襲撃を受けにくいような”場所に彼らの村を建設できるように、東のほうに 5 ﾏｲﾙほどずらすことを提案した。彼は、Manypenny に、オトエーミズーリ族は、このことが実施されない限り、(無理やりでもしない限り) 移動しないだろうと話した。Mnaypenny もこの意見に同意したが、しかし、彼はその変更の必要性は、政府側にではなく、インディアン

たちの誤解に帰す必要があるということをはっきりとさせた。こうして、1854 年の 12 月 9 日には、最初の協約が修正された。保護居留区は、東のほうに 5 ﾏｲﾙほど動かされ、こうして、オトエーミズーリ族に、沢山の木々と水とが与えられることとなり、そして、攻撃されやすいという彼らの感情を和らげることができた。新しい協約は、この変更はインディアンたちが彼らの最初の保護居留区の選択において間違いを起こしていたことによりなされたものであるという説明においても特殊なものであった。[22]　オトエーミズーリ族は、1855 年の 7 月までに移住をした。それは、ほとんどあらゆる点で、良い土地であった。大きな樹林に加えて、豊富で、水はけのよい土地が、青い川の流れの大平原が開けた小高い丘のもとに広がっていて、肥沃な堆積層が河岸の段丘となって延々と連なっていた。1875 年に、この土地が売却され、オトエーミズーリ族がインディアン領地に転居するに先立ち、その保護居留区を最後に測定したときに、この土地は、“合衆国のこの程度の区画では・・・・平均以上の土地だ”と報告されていた。[23]　確かに、そこは、合衆国の中でも肥沃な土地であった。かつまた、鹿とかビーバーといった(ビーバーは当初深刻な絶滅の危機にあったが、その後、現在では復活してきている)　この地域の動物も沢山いた。こうした中でもっとも重要であったのは、保護居留区がカンザスの中央部から西部にかけてのバイソンの生息地域に近いにもかかわらず、オトエーミズーリ族はほかのインディアンの部族との間でいろいろな問題を抱えてはいたが、略奪目的で荒野をうろついている Brule 族からは十分安全なだけ離れていたということであった。

当初は、保護居留区には、アメリカ人の入植者達による強力な圧力は無かった。(fig. 16)　1856－57 年にこの地域で働いていた測量士たちが、ほんの、Gideon Bennett の取引所と、Blue Springs, Nebraska　そして、カンザスの Oketo に、町の発祥の兆しだけを見出していたに過ぎない。1861 年までに豊富な土地と大量に木々を持った Big Blue 川の谷が、北と南の保護居留区に、入植地の中心となる形で一緒になった。Plum Creek や Wolf Creek のような保護居留区を東に流れていくような小さな川、そして、南に流れる Deer Creek や Horseshoe Creek が、やはり、先買権の所有を認められたまじめな入植者達の気を引いた。早期の入植者達も、Fort Kearney やその先の西の拠点に続く街道筋で、移住者達に物資を供給して生活をしていた人たちのいる Little Blue の川に沿っての土地を取得していた。1861 年の時点で重要な入植地であったのは、ネブラスカの Beatrice や、カンザスの Marysville で、それぞれ、保護居留区の境界からは、だいたい 10 ﾏｲﾙくらいのところに位置していた。Marshall 郡の北西部に、主権を主張された非常に大きな土地は、軍の報酬支払い証書により購入してその土地を手にしていた極わずかの投機家の所有地となっていた。この土地は、囲いもされずに、また、破壊もされずに残っている土地であるが、そこは、実際には入植されてはいなかった。土地の投機は、オトエーミズーリ族の保護居留区を取り囲むような形となった膨大な土地(特に大平原の丘の地域)が、投機家たちの手に入るようになった次の世代の姿を描きだしていた。[24]

インディアンたちは、ちょうど Plum Creek と、Big Blue 川との合流点の東の少し小

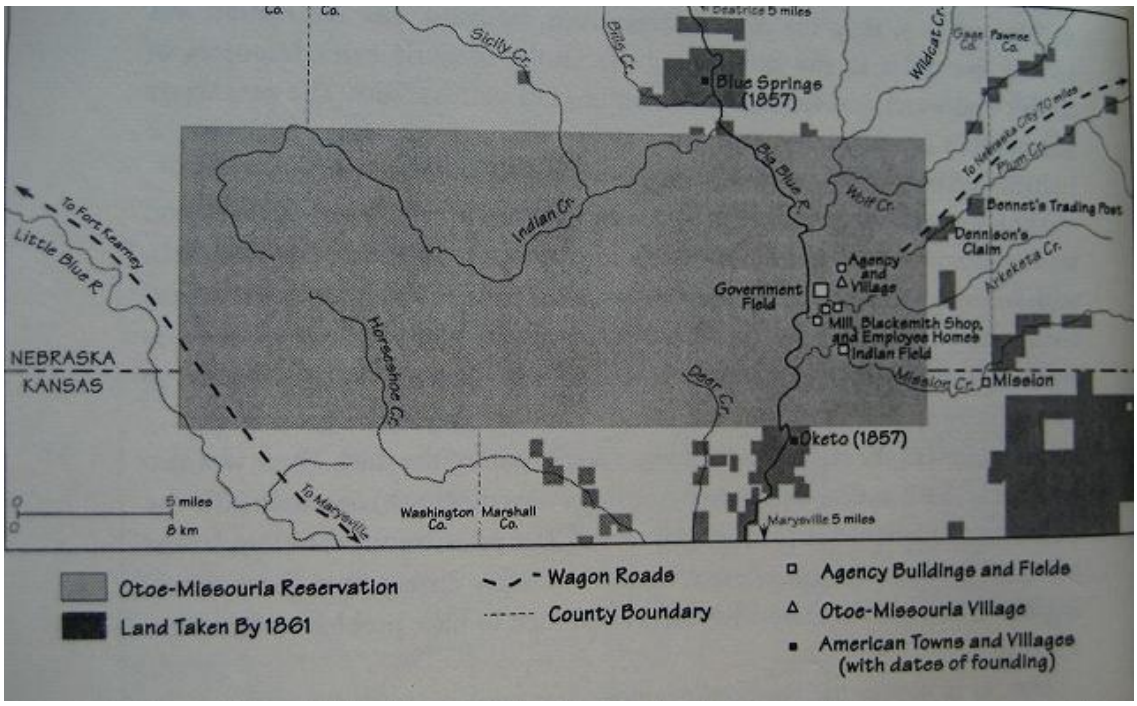

Fig. 16　1861 年ごろのオトエーミズーリ族の保護居留区と村

高いところに村を作っていた。(fig.16) ここは、ちょうど石灰岩の割れ目から非常にきれいな泉が湧き出ている場所であった。(fig. 16)　ここには、およそ、40 ほどの土作りの家と、そして、極わずかの樹皮で覆われた小屋、これは、Sauk と Fox 族の作っていたものとよく似ていたが、があった。1811 年にオトエ族の村を丹念に研究した Bradbury は、おそらく、その地に固有の形式を認識していたのではなかろうか。しかし、今、ここには、分離したオトエ族の管理事務所が設立された 1856 年の夏に、この泉の北、100 フィートのところに管理官の家が建てられ、これらに加わっている。また、その時までに、100 ｴｰｶｰほどの大平原が、管理官の部下の農場主により破壊され、そして、鍛冶屋の仕事、蒸気による製材、穀物の粉引き、さらには、従業員の家の建築などの仕事が始まったが、こうした仕事は、だいたい、Plum Creek の対岸の南に 1 ﾏｲﾙくらい離れた場所に位置していた。村からおよそ 6 ﾏｲﾙほど離れた、保護居留区から東に 1,25 ﾏｲﾙほど行ったところに、インディアン管理局との契約のもとで運営されていた Presbyterian Board of Foreign Missions が学校となるコンクリート三階建ての建物の建設を開始した。[25]

こうした約束された出だしであったにもかかわらず、協約を履行する責任における進捗状況は遅々たるものであった。そうした遅れは、インディアン関連の揉め事の処理における怠慢に原因があった。Council Bluffs の行政局に属していた最後の二人の行政官（James M. Gatewood と George Hepner）は、自分達の権威を悪用し、そのために追放されてしまった。[26]　たとえ彼らが誠実な者であったにしろ、彼らがオマハ族、ポウニー族、さらには、オトエーミズーリ族にかかわる揉め事すべてを、カンザスーネブラスカ条例に

あい前後する、その騒然としたときに処理できたかどうかは疑わしい。オトエーミズーリ族のために最初に任命された代理人の John Alston は、明らかにサウス・カロライナの西部地域のように出来なかったので、インディアンは、1857 年の２月に William Dennison が任命されるまで、事実上、統治官のいない状態であった。それ以後でさえ、Dennison は、彼自身、オトエーミズーリ族とポウニー族、彼らは、彼ら自身の代理人が、1859 年に任命されるまで、オトエーミズーリ族の代理人に業務をゆだねていたのであるが、彼らの間の揉め事に苦労をしなければならなかった。Dennison は、代理人として癒されることの無い大変な不幸にあるとの思いになり、また、そのほかの代理人の元で働く職員の資産も貧弱、そのものであった。たとえば、鍛冶屋は Leavenworth のカンザス刑務所から釈放されたばかりのもので、インディアンたちによれば、彼は、“彼の本来の仕事のことよりも、先住民の女達のことばかりを考えていた。”[27]

こうした、当初の保護居留区時代の間、年金制度は明らかに実行されていなかった。しまうことを防ぐという観点に立ち、二年毎に配給をするという考え方を再び取り入れた。品物は、Chouteau のような商人の手により、Brownsville、もしくは、Nebraska City に運ばれ、そして、そこから、悪路の道をとおり保護居留区まで運ばれていった。こうした配給物資が期限どおりに実施されたのはきわめて稀なことであった。最初の支払いがなされたのは、1856 年の５月であったが、それがオトエーミズーリ族の元に届いたのは、1857 年の３月のことであった。同じように、1859 年の秋の年金の場合には、９月のはじめころにその支払いが始まったものと思われるが、これは、その年の 12 月になってもインディアンの手元には届いていなかった。このことが、インディアンたちを、“不機嫌・・・彼らの気持ちの中で、どっちが一番大事なのか、彼らの支払いなのか、それとも、彼らのバッファローの狩なのかを計っている”にさせていたと、Dennison が説明していた。[28] インディアンのカレンダーは、次第にアメリカ人たちの時間軸の方向に向いてきて、自然の変化に適合するものではなくなってきた。

しかし、たとえそのシステムがうまく機能を果たしたとしても、オトエーミズーリ族を支援するための基金は、彼等を文明化するという計画の自慢できるほどの目標を達成するにはあまりにも少なすぎた。1860 年までに、オトエーミズーリ族は、1854 年の協定に基づき、一年に 13,000 ドルを受け取っていた。“有用な日常品”のためということでインディアン局の配慮に基づく経費を差し引くと、各個人に分配されるべきものとして彼等の手元に残ったものは、9,000 ドルであった。これは、１人あたりにして 18 ドルという結果になった。Dennison は、彼の上司に対して、毛布一枚が 18 ドル、粉引きをすると一袋当たり 15 ドル、そして、コーヒーは１ポンドあたり 25 セントというのに、これでどうやって彼等は生活できるのか　？　と問いただしていた。[29]　せいぜい良くて、一人当たりの支払いは、取引商への前年からの借金の一部を支払う程度のものであった。

蒸気の製材所と粉引き小屋は、こうした当初の保護居留区時代の唯一成功したものであった。粉引き小屋は 1858 年の秋まで動いていたが、そこでは主に垣根や代理人の家を建

てるための材木を切っていた。粉引きは、一週間に一日だけインディアンのトウモロコシを引くために使われていた。たとえば、1859 年の 1 月から 6 月までで、782 ブッシェルのトウモロコシが引かれ、12,441 フィートの木材が製材されていた。[30] 回りに住んでいるアメリカ人入植者達を助け、そして、オトエーミズーリ族が彼等独自の仕事で利益を確保できる形の、こうした粉引きや製材の事業を広げ、定着させていこうという　夢のある計画があった。

この粉引き小屋以外、政府のとった政策は、もたもたしていた。オトエーミズーリ族の者達は、自分たちの子供を教会の学校に入れることに興味がなかった。実際、Dennison でさえ、学校のことについてはあまり熱心ではなかったし、こんな風に記録を残していた。“１つの粉引き小屋だけで、すべての教会を合わせたくらいの価値がある。”と。[31] 仮に少しだけ学校にいったにしても、インディアン達が狩に出かけてしまうと、たちまちそこで断ち切れになってしまった。たとえば、1857 年の夏に、D.A .Murdock の報告では、１４人の少年と２人の少女が学校に来ていたが、ところが、７月の中ごろには、バイソンの狩が始まると、学校は空っぽになってしまった、と記録されていた。オトエーミズーリ族の男達を農業に従事させようという努力は、結局、何の成果もなかった：男達にとって農業をするということは、と Dennison が説明していたのは、それは、“彼等自身の女達を囲うこと”になるのだ、というものであった。[32]

政府の政策の無益さ以外の問題が、当初の保護居留区生活時代にオトエーミズーリ族に災難を降りかけていた。1847 年の取引法のそのほかの改正が為されていないのにもかかわらず、酒が以前よりずっと簡単に手に入るようになり、そして、正当に保護居留区の境界の外側地域に出回った。たとえば、1860 年の 2 月に、彼らが保護居留区の西約 25 ﾏｲﾙの、Big Blue 川の Big Sandy 分岐点でアメリカ人の集団と遭遇したが、それは彼らが、冬の狩から帰る途中であった。ウィスキーが入り込んできて、飲まれるようになると、オトエ族とミズーリ族の集団の間で諍いが起こり、若いミズーリ族の酋長が、刺されて死んだ。彼は保護居留区まで運ばれて、彼の家のそばに埋葬された。Dennison は、殺された男の関係者達が殺人犯とその家族の者達に対する復讐をすることを何とか抑えようと大変困難な状況にあった。[33]

他のインディアンの部族との敵愾心は、保護居留区に移るときも止むことはなかった。特に、シャイアン族は恐れられていた。1858 年の夏に、シャイアン族の戦闘集団が、狩をしているオトエーミズーリ族を、自分たちの前にバイソンの群れを誘導しながら、もっと遠くの危険な場所に誘いこもうとその後を追っていた。結局、オトエーミズーリ族はたつた一匹のバイソンすらしとめることが出来ず、秋の本格的な収穫がくるまで緑のトウモロコシに頼って生きていくしかなかった。その秋には、30 人から 40 人のインディアンが飢餓、間欠熱、そして、下痢で死んだ。オトエーミズーリ族の最高酋長 Ar-ka-ke-ta（Stay By it と言う意味）の、９月にアーカンソーの　Big Timbers でシャイアン族と協定を結ぼうという試みは、水の泡となった。[34]

彼等の村さえも安全ではなかった。1857 年の 7 月には、彼らが狩猟に出かけている間に、４０人ほどのカンザ族が彼等の小屋を略奪し、テントの覆いを引き裂き、粉を大地にばら撒き、持てるだけのものを盗んでいった。このことが、自分たちの子供を狩の間教会の学校に残しておくのは安全ではないというオトエーミズーリ族の思いをより深いものにしてしまった。こうして教会の活動は決してうまくことが運ばなかったし、1860 年には、Presbyterian Board of Foreign Missions との契約は失効されることが許可され、オトエーミズーリ族は、一世代の間、学校から離れてしまった。[35]

不思議なことに、彼等を取り巻く非入植の状態があり、オトエーミズーリ族の人口は、1850 年代の後半の時期には増加していった。最も正確な予測によれば、1861 年までに 303 人の男性と 405 人の女性を含む 708 名のオトエーミズーリ族がいた。(fig. 10) [36]　この数年間の間には、－大変ありがたいことに、1852 年のワクチン接種のおかげで―天然痘の大流行もなかったようで、このために人口が回復したように思われる。悪いことばかりの間にも、1857 年や 1859 年の夏の狩が非常にうまく行ったことや、1858 年と 1859 年にはトウモロコシの収穫が非常に良好で、一時的には生活が安定したよい時期もあった。年金の政策も、若干の不備はあったにしても、これも助けとなった。

そして、1860 年にはネブラスカの南東部を厳しい干ばつが襲った。8 月には、Dennison が、この 3 ヶ月と言うもの、“埃の舞い上がるのを防ぐ”ことさえ出来ないほど、雨がぜんぜん降らなかったと報告していた。オトエーミズーリ族の収穫は悲惨なものであった。辺地の入植者達もまた、干ばつにより壊滅状態にあり、Dennison は、農耕地を放棄し、ミズーリ州の東に引き上げていく農民が“毎日のようにいること”を目撃していた。しかし、オトエーミズーリ族には、そうした選択肢はなく、彼らは、まさしく飢餓状態の 1860 年代に直面することとなった。極僅かの人口の回復が、下降線を辿っていくなかにちょっとだけ見られた。[37]

Blackbird Hills への里帰り

オマハ族の保護居留区への道則は、二つの理由：連邦政府の政策、ならびに、ダコタ族のために複雑なものとなり、かなり遅れた。当初、インディアン局は、Ayoway(Aowa) Creek と Niobrara との間、特にネブラスカの北部にあたる地域を保護居留区にすることを望んでいた。Eastman の地図は、このことを明らかに示している。(fig.15)　Manypenny は、この地域が南のほうに行くよりも、入植者達からもっと離れているので、都合がよいと考えていたようだ。入植者達自身もまた、彼らは Blackbird Hills、ここは、オマハ族のもとの故郷であったが、ここをインディアンの保護居留区と認めたくなかったので、この案を歓迎した。もう 1 つの理由は、彼らは彼等の住んでいる周辺にオマハ族が居るということは、ダコタ族の襲撃部隊の攻撃を受けやすくなると考えていたからだ。1854 年の間と、1855 年の前半に入植者達は Manypenny と、内務省の Robert McClelland 長官にオマハ族を Ayoway Creek に移動させるよう、もしくは、かれらを Platte の南の地域に移すように繰

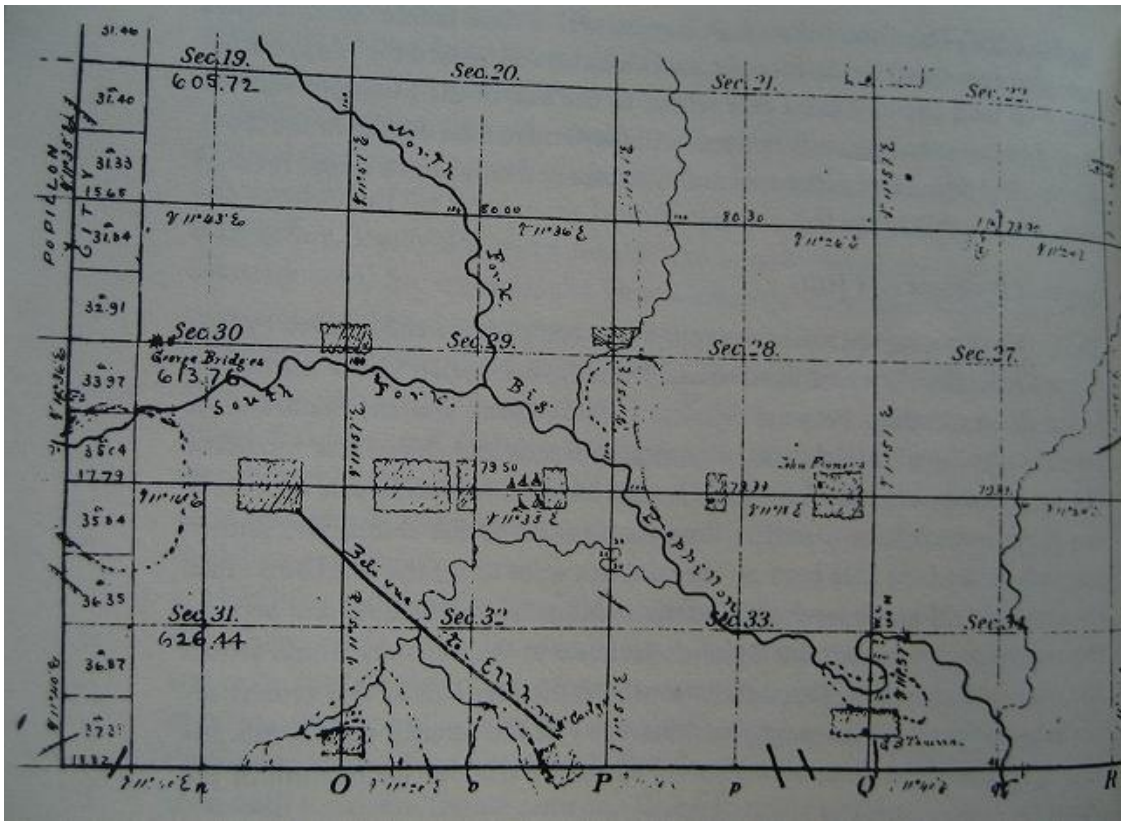

Fig. 17　1856 年頃の Papillion クリークのオマハ族の村　　最初の土地調査から。北 14 番、東 13 番領域の 6 回目の基礎測量　Nebraska State　Historical Society の好意による。

り返し請願していた。[38]

1854 年の 8 月に、行政官の Hepner は、オマハ族のグループを伴って提案された保護居留区の調査にでかけた。が、彼等はあまり良い印象を持たなかった：そこは、あまりにも細かく区分されていて、森林が殆どなく、そして、ダコタ族やポンカ族にも近く、危険な場所であった。彼等の混血の酋長の Joseph La Flesch と Logan Fontenelle に率いられて、オマハ族は、Hepner が、“明敏にそして反対の態度” と表現しているような採択をし、はっきりと、彼等の将来の居住地は Blackbird Hills にしたいということ主張した。[39] Manypenny は、再度、インディアン達が、(1854 の協定で明記されているように)、彼等が何処に住むかを彼等自身が決めることを許容するような好意的な態度を示し、これを黙認した。そして、1855 年の 5 月には彼らは、Blackbird Creek に移住していた。

それまでと同じように、彼等の計画は、ダコタ族により挫折させられていた。彼らは、Sand Hills の南東部の Beaver Creek で夏の狩猟をしている間に、Logan Fontenelle は、グリズリーベリーを摘むために本体と離れて行動をとっていた。この時、彼は、ダコタ族に谷間に追い込まれて、殺されてしまい、頭皮を剥がされてしまった。[40]　オマハの地図には、このほかにも血の流された場所が幾つか示されていた—Thugina gaxthiitho、ここは、

Fig. 18　オマハ族の保護居留区の地図、　1862 年(部分)

Thugina(Fontenelle) が殺害された場所で在る。Hepner が、“恐怖で狂わんばかり”と表現しているように、再び、ベルブーの西にある部落に退却して来た。[41]　政府の土地管理事務所は、村を Papillion Creek の分岐点近くに設定した。(fig. 17) Manypenny は、彼らが次の年の春までそこに逗留することを許可した。しかし、その年彼等にトウモロコシの収穫はなく、そして、肉を得るためにエルクホーンを追いかけて西に行くのも、また、恐怖であった。政府の肉、ベーコン、小麦粉、そして、砂糖の配給が、彼等が何とかその冬を越すのを助け、そして、彼らは、1856 年の春になると、食料を求めて、Blackbird Hills の地に向かって出発した。オトエ―ミズーリ族と同じように、オマハ族(彼等自身の強い主張に感謝して)　彼らの保護居留区としては非常にいい場所を手にすることができた。行政官の Orsamus Irish は、地図の形と、彼が、1862 年に統括官の Harrison Branch に総括した添付書類のなかで、当初の保護居留区の地理の説明を詳細に残していた。(fig. 18)　肥沃なミズーリ川の氾濫平野には、ポプラや、楡の樹、柳、そして、トリネコの“木々が生い茂り”、誠に緑豊かであった。ところどころ、川から 500 フィートくらいの高さに　立ち上がった壮観な崖は、樫の木、ヒッコリー、そして、アメリカリンデンの木で覆われていた。崖の下には、実に沢山の泉が湧き出ていた。崖のはずれから西の地域には、青々した茎の草の草原がまるでうねるように延々と広がっていた。森林のひだが、クリークに沿って草原のほうまで延びていた。そして、鹿などいろいろな動物がいたし、魚も沢山いた。瀝青の石炭などもあると予測されてはいたが、これはなかったのかも知れない。しかし、疑いもなく、Irish の気持ちの中には、保護居留区は、“望んでいるたけの素晴らしい農業地”であるという思いがあった。[42]

入植者達もまた、そのように思い、1860 年まででも、彼等は保護居留区の南と北の境界で圧力をかけ続けていた。(fig.19)　南東の外れの地域では、入植者達はデカタールの小さな村、ここで、Peter Sarpy は、取引の店を開いていたが、その周りを取り囲むように集まっていた。北の地域では、ミズーリ川の氾濫平原は、70 軒の家と、2 軒のホテル、そして、実に様々なお店のあったダコタ・シティーまで―すでにその時には、僅か 12 ﾏｲﾙしか離れていなかったが、1859 年には、この街道にはことごとく入植者達で溢れていた。入植者達、彼等は殆どが 1859 年と、1860 年に来た人たちで、軍の土地証券や、先買権などを利用する人たちで、Omaha Creek や、その小さな支流に沿った土地を手に入れていた。保護居留区から西に広がる地域は､明らかに荒廃した土地であった:Cuming County には、1860 年に、僅か 60 人の住人が居たに過ぎなかった。

こうした人種の異なる人同士が頻繁に接触するということにより、たとえば、度重なる略奪行為の訴えが証明しているように、諍いが絶えなかった。いまだ解決されていない、Chauncy Horr、彼は、Homer の近くからきた入植者であったが、彼の射殺事件のような重大な事件さえもあった。インディアンがこの事件にかかわっていたという証拠は無いが、この事件は、辺地のアメリカ人たちに好奇心を持たせた。しかし、仮に、行政官や地方の新聞の言うことが信じられるとすれば、オマハ族とその周辺に入植した人達との間の関係

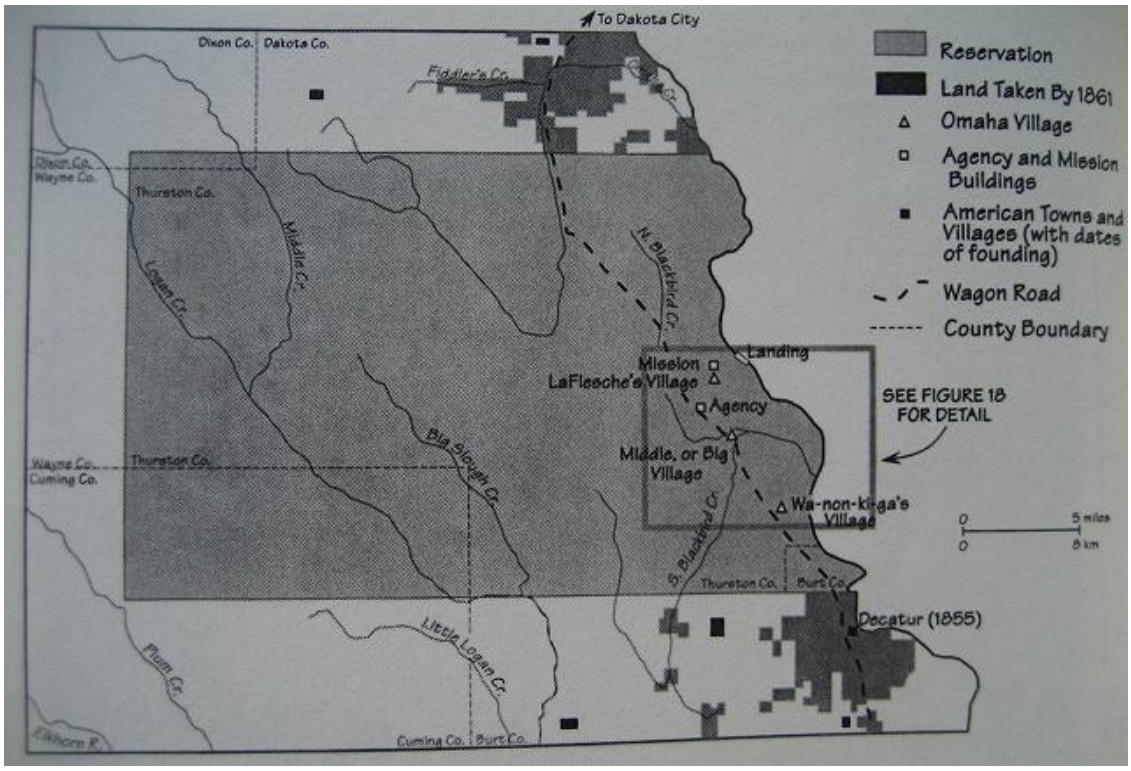

Fig. 19　オマハ族の保護居留区と村　　1861 年頃

は、おおむね友好的であった。インディアンたちは決して恐怖ではなかったし、そのうえ、新聞でもしばしば彼らの読者に思い起こさせているように、もし、インディアンたちが境界の外に出るようなことがあれば、彼らとの間の協定の第 10 項で、インディアンたちは年金が差し押さえられ、その償いをすることになっていた。[43]

オマハ族は、保護居留区に移った最初の年に、三つの地域、これらはいずれもミズーリ川に近い南東の地域に位置した場所であったが、ここに分かれて住んだ。(fig. 18 並びに 19) Big 、ないしは、Middle Village として知られていたもっとも大きな部落は、北と南の Blackbird creek の合流点に作られていた。Decatur と Dakota City につながる幌馬車用の道が村の西へとすぐに出られる崖に沿って走っていた。北におよそ、3 ﾏｲﾙほどいったところ、ここは、Horsehead Creek が崖から流れ出ているところの近くであるが、ここに、Joseph La Flesche と彼に従うものたちが、“Village of Make –Believe White Men” という 1860 年代には、まるで愚弄しているように知られた木造の丸太小屋の村を作った。三番目の居住地は、Wa-non-ki-ga's 村として知られた部落で、幌馬車の通る道の近くの、Decatur からあまり離れていない丘の上に作られていた。この部落は、住民達が、Decatur に住んでいた白人の入植者達に木材を売り、収入を得ていたので、Ton'-won-ga-hae's の村、あるいは、“木の生業もの達” としても知られていた。沢山のインディアンたちと、そして、La Flesche, Henry Fontenelle、John Pilcher なども含めた混血の人達が、それぞれ独立した家を構え、財産を所持していて、それは、この保護居留区は、(行政官の Moore の目から見て) まるで、“白人達の入植地他のような様相” を呈していた。Dakota の襲撃があまり

にもたびたびおこり放棄されてしまった、1804 年に Lewis と Clark の探検隊の隊員達がみた沢山の村がのこるオマハ・クリークの由緒ある場所には、もはや誰も住んでいなかった。

インディアンと行政官の状況は入り混じっていた。行政官の村は、幌馬車の街道筋、ミズーリ川の西 3 ﾏｲﾙくらいのところにあった。別の街道、もしくは、道が、行政官の村から、丘の上をとおり、水が増水すると氾濫する平原を横切り、ミズーリ川の上陸地点、ここに毎年の支援物資やそのほかの物資が配送されていたのであるが、ここにつながっていた。教会、―これは、17 部屋をもつ石灰岩作りの三階建てであったが―が、その上陸地点の丘の上に、1857 年に建てられた。その下には、製材と粉引き小屋が建てられ、鍛冶屋があり、そして、そこで働く人たちの家が建っていた。ちょうど、その西側は、La Flesche の一団の部落で、ここは、合衆国政府から提供されるさまざまな援助を手に入れるのにまことに好都合の場所であった。[44]

このようにオマハ族の保護居留区への適合がうまくいったことは注目に値することであった。1856 年の秋までに、行政官の John Robertson は、“彼らの状況の改善に喜ばしい兆候”が見られると報告することが出来た。インディアンたちは、その年、125 ｴｰｶｰの政府の土地と、彼ら自身の農場で、6,000 ブッシェルのトウモロコシを育てた。また、1856―57 年にかけての冬の狩も上出来な結果となり、800 枚の毛皮と、沢山の皮革、そして、大量のバイソンと鹿の肉を手にして戻ってきた。1857 年には、Robertson は、改めて、オマハ族は、トウモロコシほかいろいろな野菜の収穫が豊富で、“大いに喜んでいる”と報告していた。1858 年の夏の狩も非常にうまくいったが、しかし、彼らは、自分達の住んでいる場所の人口が増えるに従い、毎年、動物達の数が少なくなっていくことに気づき、彼らは、農業に力を入れるようになり、収穫も増えていった。1861 年には、トウモロコシが 12,000 ブッシェルという“豊富な収穫”を生み出すことが出来た。場所によっては、ｴｰｶｰあたり、80 ブッシェルもの収穫があった。そして、飢えに苦しんでいた、“自分達の友人でもあるポンカ族”に、沢山の食料を送るほど、余裕があった。そして、残りのものをアメリカ人の入植地域で売ることも注意深く観察していた。こうした豊富な食糧事情と大きな健康上の問題も無かったので、オマハ族の人口は毎年、次第に増加してゆき、1861 年には、950 人にまでなった。(450 人の男と、500 人の女であった。) [45]

こうした彼らの保護居留地に移る前の悲惨な状況からの回復について多大の功績をもたらしたのは、インディアン局とそのアメリカ市民化の政策のおかげであった。説明のつかないような理由(おそらくは、彼らの長い歴史の中での友好的な世評によるものであろうが、)で、彼らは、ほかのネブラスカのインディアンたちよりも沢山の政府からの援助を受けることが出来た。1854 年の協定に基づき、彼らの一人当たりに支払われる額は、ポンカ族やポウニー族に対して支払われていたものよりも二倍もあり、オトエーミズーリ族に対するよりも高い額が支払われていたことは間違いない。(table-6) 年金として各個人には、現金が毎年、21.50 ドル支払われていた。さらに、1861 年まで、彼らは農業支援という形

で、毎年 3,500 ドルも受け取っていた。行政官の農民達は、毎年春には、広大な農地を耕し、そして、種を蒔き、必要なところに、家畜をいれ、農具も持ち込んでいた。彼らのこうした努力のおかげで、インディアンたちは、自分達の伝統的な穀物を育てるのと同じように、非常にうまく小麦やモロコシを栽培することができた。オマハ人の教育計画も沢山の基金の支給がなされ、合計で年間 2,500 ドルにもなり、これに関連した学校も精力的に開校され、1861 年には 54 人もの生徒が集まった。先生をしていた Charles Sturgis が説明しているように、家では母親が女の子の手伝いなしでは仕事が出来ないこともあり、学校には男の子のほうが女の子の数よりも多かった。[46]

しかしながら、オマハ族の政策が成功したのは、彼ら自身の努力の賜物であった。アメリカ人たちの怠慢があったにもかかわらずである。蒸気仕掛けの製材と粉引き小屋は、建設が遅れ、いつも故障ばかりしていた。1861 年までは、“故障が日常茶飯事”の状態であった。粉引き小屋で働いていた技術者達は、役に立たない労働者のせいにしていた。(彼らは、1859 年にボイラーを吹き飛ばしてしまった。) 概して、行政官のところにいた従業員の質はあまりよくなかった。行政官は、来るとすぐにまた帰ってしまった。Hepner は、オマハ族の年金をごまかしたことで告発され、そして、地方新聞とインディアン局は、それが実際にあったと信じていた。(嫌疑は、1918 年に、裁判所が Hepner は、オマハ族の金$15,069 を“不正横領”したと判決されたときに、確かなものとなった。) William Wilson は、たったの一年いたきりで、しかも、そのほとんどは、Decatur の彼の家に閉じこもったきりであった。彼は、インディアンたちを、年金をもらうために呼びつけ、それを、ウィスキーのお店からたった 200 ヤードしか離れていない場所で取り扱っていた。(オマハ族の酋長が抗議をしていた) 少なくとも、宣教師のうちの 1 人は性質が悪かった。1857 年に Reverend William Hamilton は、Joseph La Flesche から、彼が一生かけて蓄えていた、1,800 ドルの借金をした。Hamilton は、この金は、すぐに 10 パーセントの利子をつけて返却すると約束したが、しかし、彼は、1859 年に Flesche が、合同行政長官に申し立てをするまで、たった 300 ドルと、当時、200 ドル程度の価値しかない、“一バーレルの水”も運ぶこともできないような怪我をしたミュールを返しただけだった。さらにその上、Hamilton は、1858 年にはどこかに隠れてしまった。Hamilton はその後もオマハ族のなかで宣教師の活動を続け、そして、La Flesche と深い関係を持っていたので、疑いは、ことあるごとにもたれたが、この事件は、La Flesche をして、“政府が、自分たちの仕事にするのに熱心で、貧しいインディアンたちを投機の対象としないような正直な人間を、われわれの子供たちの教育のために送ってくれるような日が来ること”を切に望んでいるというような行動をとらせた。[47]

合衆国政府のこれ以外の重要な失政は、1854 年の協約の第 7 項に、明示的に規定されていたような責任問題の、オマハ族を守るということに関するものではなかった。1860 年の 1 月に、オマハ族の指導者達が、La Flesche の家に集まり会合を開き、保護に関する条項を守ってほしいと要請した。彼らは、最近おきた襲撃事件を列挙した：サンテ・ダコタ

族が、1855 年以来、三度にわたり保護居留区を襲撃し、馬を盗み、そして、約束を破っていると、そして、1859 年には、Brule の戦闘部隊が、オマハ族が夏の狩から戻る途中を襲撃し、七人のオマハ族のものが殺された事実を挙げていた。こうした襲撃は相変わらずオマハ族を“継続的な警戒心と恐怖”の気持ちにさせていた。そして、1860 年のある時点で、彼らは、彼らの居留区での生活を断念し、保護居留区の南のアメリカ人たちが入植している安全な土地にティピーを建てて、そこで生活するようになった。[48]

オマハ族がこのような逆境にもかかわらず繁栄したという事実は、La Flesche の強力なリーダーシップによるところが多々ある。彼は、フランス人の毛皮商人と、オマハ族、ないしは、ポンカ族の女との間に、1818 年ころ、Omaha Creek の大きな村で誕生した彼は、子供のころは、ダコタ族の親戚のところで育てられ、オマハ族とアメリカ人の両方の生活の経験をしながら成長し、St. Louis で取引をする父にたびたび同行していた。
若者になるまでに彼は、ダコタ語、ポウニー語、アイオワ語、そして、フランス語も話すことが出来るようになった。1840 年代は、部族の消滅の危機が次第に明らかになって、ベルブーでは、この時期、破れかぶれの状態であったが、彼は、Big Elk の世話の下で生活をし、そして、自分のよき指導者としての現実的な考え方を、アメリカ人的なやり方に適合させていく必要性があると考えるようになった。La Flesche は、(後になって、彼は、分配の晩に、かなり苦々しい思いで説明していたが、) インディアンが生き残っていく唯一のチャンスは、“白人となること”しかないと、説得するようになった。[49]

しかし、こうした認識にもかかわらず、La Flesche は、オマハ族の社会のなかで生きていくことを選択した。彼は、1840 年代の後半には、(Big Elk の招きで)バイソンの狩のための準備会議に加わって、そこに集まった有力な指導者達に百もの贈り物(wathin'ethe)をするという、伝統的なやり方で部族の酋長の地位にまで上っていった。1850 年代の前半に、Big Elk の息子であり、その後継者がなくなると、La Flesche は、その過程のなかの親族関係の規則を曲げ、その地位を事実上自分のものとした。Big Elk 自身が無くなったときに、La Flesche は、オマハ族のなかの二つの有力な酋長のうちの一人としての彼の地位を確立した。

保護居留区で生活していた当初の有力な酋長として、La Flesche は、オマハ協定を遂行することに固執し、そして、彼の部族の者たちのあいだでの序列をより強くすることに厳格であった。1856 年に、彼と行政官の Robertson は、Ma-hu-nin-ga(No Knife)を指揮官とし、保護居留区のなかで酒を飲むことを排除するための警察組織を確立した。その規則を破ったものはだれであれ、統治官の R.J.Burtt の言葉を借りれば、“一週間は、横たわっていなければならないほどの厳しい鞭打ちの刑”が与えられた。警察は、教会の学校にいくことを進めたり、盗賊を罰したり、諍いを抑えるなどの活動もしていた。1860 年まで、この警察の力を支援するために毎年、年金の中から、合計で 1,200 ドルもの金が拠出されていた。1858 年には、インディアン局がオマハ族の保護居留区の大きさを催促するとの考えであるとの情報に呼応して、La Flesche は自分の部族のなかで“偉大なる会議”を組織

した。彼らは、分配量なども含めた彼らのアメリカ市民化政策に対する彼らの誓約を宣言したが、しかし、彼らは、彼らの土地に手を加えるようなどんな施策にも積極的に反対した。オマハ族の数は次第に増加しており、La Flesche は、こうしたことを議論し、そして、彼らはやがて、保護居留区を埋め尽くすことになった。

1860 年に、La Flesche は、インディアンたちが保護居留区にすむことを強制するようなことも含めた行政官のやり方を規定するために、倫理の基準を描いて、再びオマハ族の権利を擁護することに努めていた。この時代を通して、La Flesche は、年金の支払いについて非常に厳しい監視(これには正当な理由があった)を続けていた。彼は、腹心の友である、Presbyterian 教会の Reverend Burtt を使い、“行政官と統治官が結託して”いると疑っていたので、彼とともに勘定をよく調べていた。そして、彼は、オマハ族は、彼らの一人ひとりの年金は、紙幣ではなく、硬貨で払われるべきであるとの確信を持った。そして、“けばけばした役立たずのもの”より、むしろ、農業機械や、薬、そして、そのほか実用的なものに年金の基金を向けていくようにとかげで努力していた。La Flesche は、たとえ、オマハ族のものがアメリカ人のもとで生きていくことを強いられたとしても、彼らはそれを無視して生活をしてはならないと、決断していた。[50]

少なくとも、この段階で彼のしてきた努力は、インディアン局からは大変感謝されていた。これは、彼らが望んだ成功の構図の姿でもあったし、オマハ族のケースは、そのほかのインディアンたちのモデルでもあった。行政官は、La Flesche の“賢明な誠実さと聡明さ”、に対し、そして、彼の“すばらしい実績”と、彼の部族の条件を改善しようという“たゆまぬ努力”に対して、大いに敬意を表した。[51] そして、実際に彼は、成功したのだ。1851 年に彼の村は、Decatur の町よりも木造の家が多く建っていたし、彼の支配する農地は、彼自身の親族の者とともに彼の部族の者たちによって耕作されていて、余分なものを販売するほどまでの収穫があった。[52] Hamilton に対して 1,800 ドルも貸すほどの金を持っていたという事実がこのことを物語っている。

しかし、La Flesche は、オマハ族のすべてのものに対して、主要な人物たちに対してさえも詳しい話をしていなかった。Big Village と Wa-non-ki-ga's Village は、保守性を維持していた。Reverend Burtt は、いつでも La Flesche の部族の村では歓迎されていて、彼は、そこで、たとえ理解はしてはいないかもしれないが、非常に熱心は集会が持たれていたことを見ていた。しかし、彼が、Big Village で、日曜の説教をするためにあずまやを作ることを提案したときには、彼はインディアンたちから、インディアンたちの心を毒するような試みをしようとしていると非難する人たちから、ひじ鉄砲を食らった。[53] 彼らは、依然として土作りの家やティピーに住み、伝統を忠実に守り、そして、アメリカ市民化政策を拒絶し続けていた。Fletcher と La Flesche は、当時、三つの場所に分かれていた彼らの分派のものたちは、“部族としての重要性は無い”とみなしていた。そして、彼らは、みんなが会議でなおも顔を合わせていたし、彼らはバイソンの狩猟のときには、hu'thuga にキャンプをしていたことも事実である。[54] しかし、明らかに、1861 年までに、この集団は、

分解したのではないかも知れないが、二つの別々の道を歩んでいた。そのひとつは、インディアンの過去に留まることであり、そして、もうひとつは、アメリカ人としての将来を模索するというものであった。

Loup 川の地への収容

ポウニー族は、保護居留区へのもっとも混乱した移住を行った。彼らは衰退が長引いていたにもかかわらず、依然として強力な力を保有しており、当時、400 人から 500 人の武

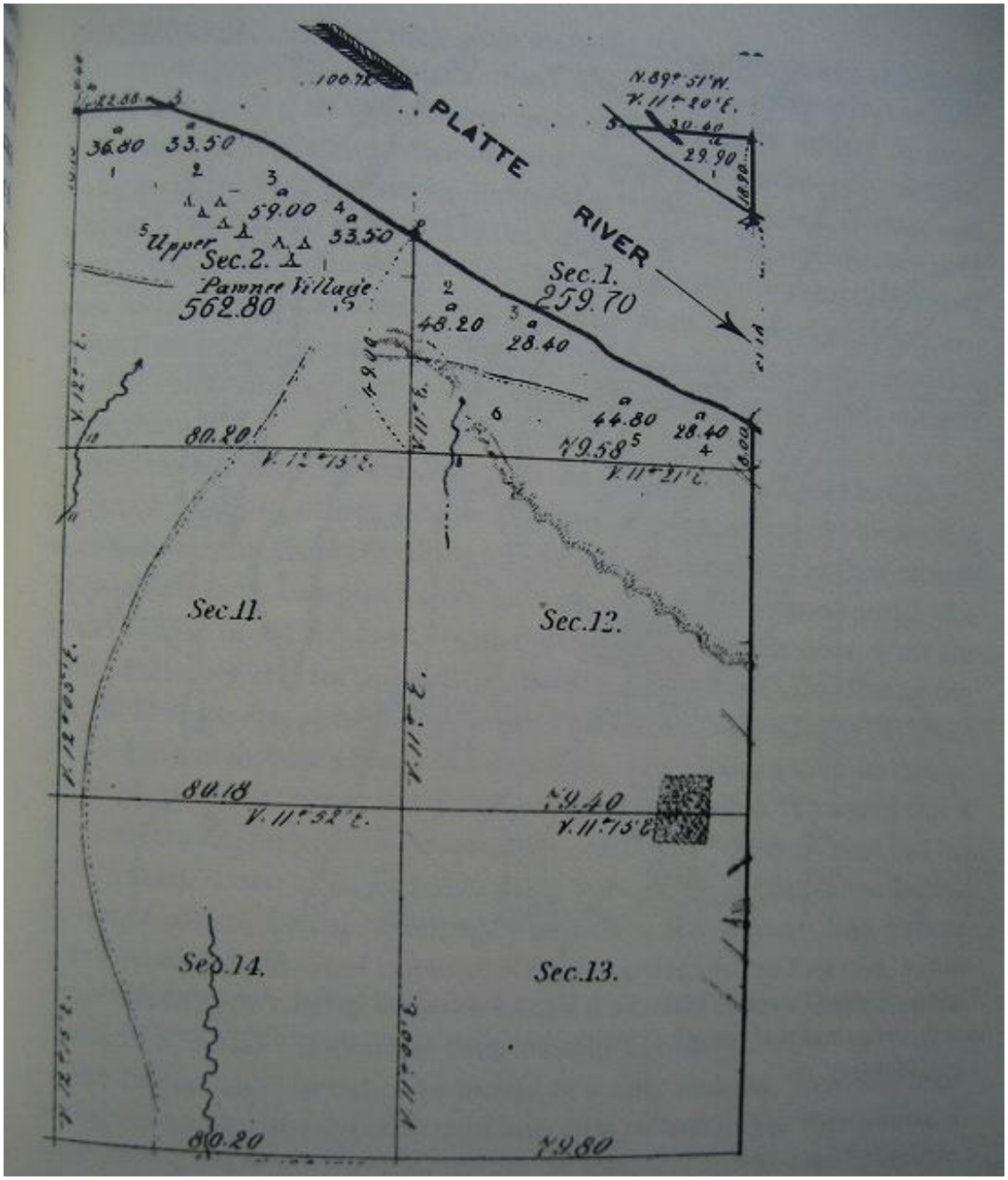

Fig. 20　上流ポウニー族の村　　1858 年　最初の土地調査から。　北 14 番、東 13 番領域の 6 回目の基礎測量

Nebraska State　Historical Society の好意による。

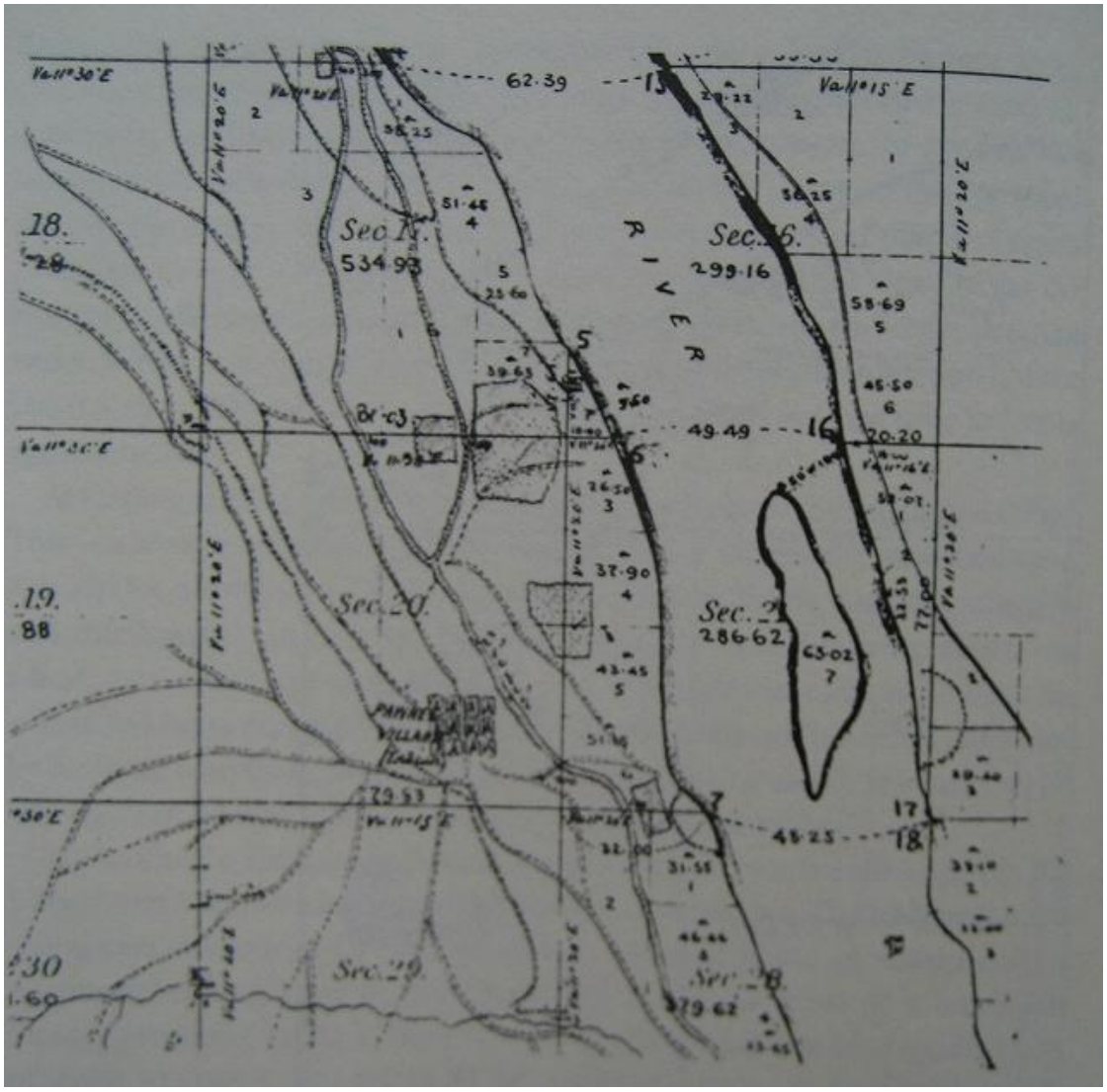

Fig. 21　下流ポウニー族の村　　1858 年　最初の土地調査から。　北 16 番、東 9 番領域の 6 回目の基礎測量

Nebraska State　Historical Society の好意による。

装した戦士を平原に繰り出すことができた。彼ら全体の人口は、－1861 年には 3,414 人で、―　これは、当時ネブラスカの領域にあったどんな都市よりも単一ではずっと大きかった。そして、馬の数は－1,200 頭から 1,500 頭を保有しており、－これが彼らをこの地域では図抜けて裕福にさせていた。1859 年の夏の前に、彼らは Loup 川の沿岸の保護居留区に移住したときには、彼らは、1840 年代の後半にダコタ族に誘導されて移った Platte 川の南側の土手の地域の三つの村に住み着いていた。(fig.14) それらの村のうちの二つは、当時、Upper と Lower Village の名前で知られていて、これらは、1856 年と 1858 年の政府の土地測量によってもその場所が示されていた。(fig. 20 ならびに 21) もちろん、ここは政府の管理する土地で、1833 年の協約で手に入れられたもので、当時は、アメリカ人が入植す

るためにどうしても必要な土地であった。移住者達は、毎年毎年増加してゆき、西に向かい、川の北がわ、ここは、Upper Village の近くの丘からも見えるところであるが、ここに集団移住を始めた； あるものたちは、ここに、Fremont, Columbus そして、Fontenelle の町を探してここに留まり、あるいは、Shell Creek の河岸に作ったアイルランド人たちの部落のような、田舎の集落の周りに住み着くようになった。Shell Creek の西の地域は、もともとは、ネブラスカのインディアンたちや、アメリカ人の知識人たちからは、ポウニー族の土地であると考えられていたが、しかし、そこは、1854 年にオマハ族により売却されてしまったのだ。（fig. 13） ポウニー族はこのことに非常に激怒し、彼らはこの売却された土地に入ってくるアメリカ人たちを侵略者だとみなしていた。[55]

こうした状況の下では、諍いは当然のごとく発生していた。そうした諍いの原因はポウニー族による窃盗とか、嫌がらせ、そして、入植者達による侵略や彼らの敵愾心、そして、文化的な誤解など、さまざまなものに起因していた。双方の側の恐怖が小さな出来事を大変な事件にまで膨れ上がらせていた。要因同士のこの重なり合いが 1856 年の秋に発生して、翌年の春まで続いた暴力行為の発端の影に隠されていた。ポウニー族は、食料とするトウモロコシがほとんど無く、飢餓の状態にあった。馬達は痩せこけて冬の狩に出発するには、あまりにも体が弱っていたが、とにかく、ダコタ族は草原で、彼らがくるのを 待ち伏せていた。彼らは、合衆国からの年金が何もなく、彼らの行政官であった、William Dennison は、オトエーミズーリ族の方にばかり目を向けていて、彼らには、ほとんど注意を払っていなかった。そこで、彼らは、（ 当時、彼らの通訳をしていた ） Samuel Allis に、“白人達が自分達の土地の近くにまで来て、そこにある木を切り倒している”と、不平を述べた。一方、入植者達は、逆にインディアン局に、ポウニー族が自分達の村の近くに居残り、草原を焼き払い、そして、“物乞いをしたり、窃盗を繰り返したり、ののしったりして”、恐ろしい暴力を振りまいていると。そして、彼らは、“白人達の中で生活するのに適していない”ので、Loup 川の方に移住させられるべきだと不満を述べていた。ポウニー族の酋長は、彼らの部族の若い者達が無礼な行いをしていたことを認めたが、しかし、それ以上に、彼らは、Denison にたいして、彼らの意図は、誤解されていると説明していた。La-Pe-tara-na-sharo（ コマンチ族の酋長 ） は、なぜ、彼らは、“侮辱をされずに白人達の家を訪問することができないのだ”と、疑問を投げかけていた。[56]

緊張は、ますます高まり、そして、1857 年の春、Chaui の酋長の Te-Ra-eta-its が殺されたときに最高に達した。西部に狩にいくことが出来ず、ポウニー族の一部のものが、Missouri 川の近くで冬をこしていたが、ここは、入植者達が彼らの馬を盗んだところであった。彼らが村に帰る途中、Te-ra-eta-its と、彼の共の、Kitkahahki 族の Sh-laa-wa-te-de が、食料を請うために入植者の小屋に近づいた。かれの友達は気を使って少し離れて待ち、Te-ra-eta-its がドアをノックした。Davis という名前の入植者が出てきて、杖で Te-ra-eta-its を数回殴りつけた。そして、彼は家のなかに入ってゆき、鉄砲を持ってきて、Chaui の酋長を撃った。4 月 27 日にポウニー族の村で開かれた長老会議で、Sh-laa-wa-te-de が、彼の

受けた仕打ちを話し、その話を聞いたあと、Dennison は、それは、ポウニー族の捨てばちの状況であったことと、Davis の、人を殺すまでした“無分別”によるものだと結論した。恐怖のどよめきが辺境の地の社会に広がっていった。復讐を恐れて、入植者たちの移動が始まり、ミズーリまで退避した。そして、“Salt Creek の南側”で、インディアンに出会ったら皆殺しにするということを言って、市民軍が結成された。この地域の新聞が、パニックの火を煽り立て、ポウニー族をこの開拓の地から追い出すために“Uncle Sam”(合衆国政府)の出てくることを求めた。[57]

ポウニー族のほうもまた、安全な場所に移らせてもらうことを望んでいた。彼らは、1855 年以来、協約を作ること、そして、年金をもらうことをずっと願っていたが、しかし、彼らは、Dakota 族からは遠く離れた Platte 川の南側に保護居留区を望んでいた。しかしながら、Ta-ra-ta-putz(殺された酋長の親族のもの) は、Dennison に対し、４月の会議で、今回は、自分たちは土地に対する公正なる支払いを求めているのだ、と不満を述べた：“われわれは、確かに支払いの受け取りはしたが、われわれが最後に合意した、そのときには、その土地の殆ど価値がなかった。” さらに、“しかし、土地の価値が上がった今とすれば、われわれは、もっと沢山の支払いを受けて然るべきだと考えている。”と、問題を提起したのだ。[58] ネブラスカ領地の Table Rock で、1857 年の 9 月 24 日に協約が最終的に合意したとき、ポウニー族は、間違いなく、1833 年と 1848 年に彼等に支払われた一ｴｰｶｰ当たりの支払いよりも沢山の額を受け取っていたが、しかし、彼等の人口から考えたら、それは誠にお粗末な額であった。(table 6) 支払いが最も高い比率であった最初の五年間の間でさえ、彼らは年間に 12,000 ドル相当の品物(主として、毛布、各種の布の類、ナイフ、斧、そして、鍋や釜など) で、１人当たりにすれば、およそ 6 ドル程度にしかならない、12,000 ドルの硬貨を年金として受け取っていたに過ぎない。その上、かれらは、“不承不承ながら”、そして、またしてもダコタ族の言いなりになってしまうため、当然のことと考えられるような恐怖を持ちながら同意した Loup 川の河岸にある保護居留区を受け入れざるを得なかった。

彼等は、1858 年の間と 1859 年の初めの半年は、片方はアメリカ人入植者達、そして、もう一方は、Brule 族と Oglala Dakota 族との間に挟まれ、まるで天国と地獄の間のようなところで暮らしていた。Dennison が、1858 年に、彼らは批准されるはずの協約と最初の年金(これはその年の秋になって、やっと支給された)を待ち望みながら、そして、彼らの伝統的な土地を入植者達に次第に取り上げられるのを強いられて、“まさに耐え忍んでいる”と、報告していた。Dennison によれば、こうした入植者たちのなかには、ポウニー族の村の周辺で、ウィスキーを販売したり、慎ましやかな生活のために支給される生活用品を買い込んだりして生計を立てているごろつき達が含まれていた。[59]

そして、1859 年の春から夏の初めには、ポウニー族と入植者達の間の敵愾心に別の火の手が上がった。ポウニー族は再びその前の年の冬の間、ダコタ族により狩猟の場から追い出され、食料に窮していた。三月と、そして、七月にもう一度、ポウニー族の若い戦士

たちが、Elkhorn の川沿いの村を暴れ周り、馬や羊を盗み、そして、家々を襲い、郵便局を破壊し、新しくこの地に入植して来た人たちを震いあがらせていた。たった一人だけおおきな傷を受けたものが居たが、殺された者は一人も居らず、沢山の人たちは、“彼等の失われた運勢を取り戻す”ために、Colorado の鉱山に去っていった。この紛争のなかでポウニー族は、４人の若者を失った。竜騎兵と各地から集まった志願兵が Fort Kearney から Fontenelle に派遣された。Shell Creek には 1,000 人ものポウニー族が集まり、攻撃を仕掛けようと待機しているというでたらめの噂が広まった。これ以上の暴力沙汰は、ポウニー族を彼等の新しい保護居留区に安全に隔離することで防ぐことが出来たが、しかし、事態はこれで終わったわけではなかった：沢山の主張をつくり上げた彼等の新しい行政官の James Gillis からの異議にかかわらず、その被害に対する保証として、その年に支払われる年金から、10,000 ドルもの額が引かれることとなった。[60]

しかしながら、保護居留区はすでにその時、他の浮浪者たちによって占領されていた。1857 年の春に、モルモン教の分遣隊が、Loup 川と合流する、Beaver Creek の丁度東側のすこしばかり上流のところに、Genoa の町を作っていたのだ。彼らは、町を壁で囲み、その中に、丸太小屋やたくさんの小屋を建て、そして、平地には、1000 ｴｰｶｰほどの農耕地を開発していた。その南側には、Beaver Creek の川の土手にはポプラの木が茂っており、そこに彼らは、製材所と粉引き小屋を建てていた。1859 年の 8 月までには、なんと、この遠方の開拓地に、200 人もの住民が住んでいた。モルモン教徒たちはある日突然自分たちがインディアンの保護居留区に居ることに気がついた。そこで彼等はインディアン局に対して保護居留区の東の境界線を Beaver Creek の西側に変更するように請願した。そうすれば、彼等は自分たちの作った村に居残ることが出来るというわけだ。しかし、モルモン教徒たちは、インディアン達以上に嫌われ者であった。そして、彼等の住居の補償の約束をしたあと、Gills は彼等にその場所を立ち退くように指示した。1860 年の春までに、彼らはそこを立ち退き、そして、ユタ州の新しい聖地に向かって旅立って行った。[61]

このようなわけで、ポウニー族は有難いことに、すでにかなり開発されていた保護居留区を受け継ぐことになった。1861 年に Gills に変りインディアン行政官になった Henry DePuy が着任すると直ぐに彼の上司の統治官である Branch にその地域の詳細な説明と地図を報告していた。(fig.22) [62] そこは、“とても豊かで肥沃な、”土地であると、誇張なしに書いていた。この肥沃な土地は、Loup 川から北の丘陵地まで一ﾏｲﾙも広がっており；その丘からは、Beaver Creek , Cedar Creek そして、Plum Creek のような川が流れだしており、その川沿いは木々が生い茂り、肥沃な土地で覆われていた；そして、南のほうには、Platte 川の方角に広大な草原がゆるやかなうねりをつくり下っていた。

ポウニー族は、Beaver Creek と Loup 川の間の平原となったところに拠点を作り、ここに住んでいた。そして、夫々の村は南に向いて土塁を築き、また、北側は Creek があったので、これで防護としていた。Skiri 族は、1,166 人と言われているが、西の地域に二つの村を形成していた；三つの小さな集団からなっていて、彼らは人口がすくなくなり、相互

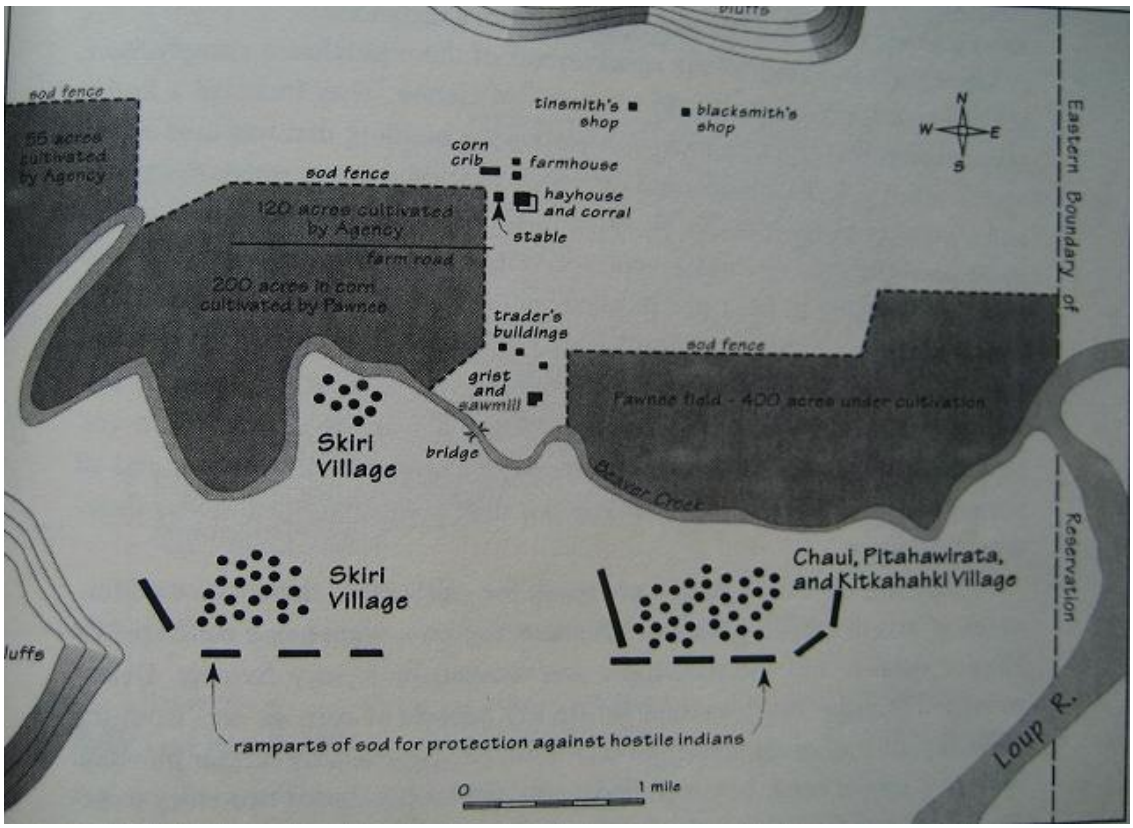

Fig. 22　ポウニー族の保護居留区についての DePuy の地図、 1861(色塗りされた部分)　1861 年 6 月 30 日　DePuy から 1859 - 62 年まで行政官だった Branch に贈られたもの。　Nebraska State Historical Society, RG 508　の好意によるもの

に婚姻関係を作り、あるいは、安全上の問題から他の集団などを吸収して、密接な関係を持っていた。Chaui 族は 903 人、Pitahawirata 族が 561 人、そして、 Kitahahki 族は 784 人がいた。かれらは全部合わせて、200 個くらいの小屋に住んでいたが、この小屋の大きさは、直径が大隊、50 ～60 フィートくらいであったが、これらのもののなかには、僅か 2 年くらいの使用ですでに壊れかけているものもあった。DePuy が、いたずらっぽく、“近くから見るとキチンとしているわけではないが”、しかし、“遠くから見れば、・・・・かなり美しい”光景だと述べていた。

行政官のための沢山の建物があったが、これらは殆どのものがモルモン教徒から安く譲り受けたもので、これらが、Genoa の街の旧市街を占拠していた。そのなかには、あまりよく修復されていない農家、行政官の事務所としてつかわれた 60 フィート四方の小屋、そして、町の中心の通じる道のついた、2,500 ブッシェルほども蓄えることの出来るトウモロコシの貯蔵所、せいぜい持ったとしてもあと一冬くらいの朽ちかけた家畜小屋、“まさしく廃墟と化した”とも言うべき鍛冶屋の店、最も、この小屋はモルモン教徒からトウモロコ

シ 7 ブッシェルで買ったものであったが、さらには、外壁の壁は落ち、雪が被ったままの行政官の家などがあった。行政官の家から 1.5 ﾏｲﾙほど南にいったところに、二階建ての樫の木で建てられた蒸気製材所と穀物の粉引き小屋があったが、そのポンプは壊れていて、パイプはねじれたままであった。殆どの建物は、立ち木のままのポプラの木で作られていて、あらゆる部品が使い物にならず、“まったく役に立たなかった。”DePuy は、こうしたものすべてのものの価値は、全部あわせても 5,000 ドル程度だと見込んでいた。

1861 年までに、すでに 1,000 ｴｰｶｰもの土地が開墾されていたが、これはモルモン教が固い土地を耕したことに感謝しなくてはならない。これらのなかの 825 ｴｰｶｰは、ポウニー族の女達により、耕作が引き継がれ、残りの土地は行政官の使用人により耕された。DePuy は、ポウニー族はこの農地から、1 ｴｰｶｰあたり 20 ブッシェルのトウモロコシを収穫していたと見込み、もっと開墾が進めば、その量は毎年増加していくといっていた。ここで一番切実な問題は、学校であると判断した彼は、75 人の子供が就学できる、32 フィート x 76 フィートの二階建ての学校を建てる計画を立てた。当時、ポウニー族に対しては、人口的な圧力は殆どなかった。ただ、Columbus に向かい、Loup 川沿いに僅かに孤立した入植者達の小屋があった。そして、保護居留区の南西に分岐している遠距離の道路、この道は Platte valley に行くものであったが、ここに繋がる道があった。(fig. 23)

しかしながら、この保護居留区に重大な不都合が直ぐに表面化した。最初の年に、村は少なくとも 8 回もの襲撃をうけ、13 人ものポウニー族が殺され、30 匹もの馬が盗まれ、そして、60 もの小屋が破壊された。勿論、ポウニー族が無防備であったというわけではないが、たとえば、1860 年の 9 月のときなど、かれらは、シャイアン族を大平原まで追撃し、彼等の馬を奪い返し、8 人を捕虜にし、そして、襲撃してきたものを二人も殺していた。しかし、Brule と Oglala Dakota は、強敵であった。彼等は、単独と言うだけでなく、時に、合流してきて、ポウニー族より多人数となったばかりでなく、政府の意図した緩和策により、あるいは、毛皮を得るためにはどんなことでもするという商人たちから手に入れた銃で、よく装備もされていた。かれらの戦法は、ポウニー族が夏の狩に出かけている留守に保護居留区を襲撃するというものであった。1860 年の春から夏にかけて、彼等は保護居留区の直ぐ近くに待機していた。そして、6 月の終わりに二度ほど襲撃を加え、村に残っていたポウニー族の女を殺し、頭皮を剥ぎ、家を焼き払い、馬を盗んでいった。そして、7 月の 5 日に再び襲撃をしてきて、3 時間もかかる道則にある沢山の住居を焼き払った。この時には、行政官の Gills は、彼の家のしたにある格納庫に女達、そして、子供たちを隠して、助けた。襲撃の度に、Gills は、(彼はアメリカ人としての特権を持っていた) Dakota 族に引き上げるように説得をした； その度に、彼等は、Loup 川を渡って引き下がる時には、また戻ってくると言い放っていた。9 月のはじめに、400 人から 500 人の戦士たちが保護居留区の西の地域に集まり、襲撃することを決めた。この時には、Alfred Sully 大尉に率いられた騎兵隊が Fort Kearney から Pawnee 族を守るために移動してきたので、Dakota 族は、自分たちの居留地に退却した。しかし、Gilles を愕然とさせたのはこの騎兵隊はほんの僅か

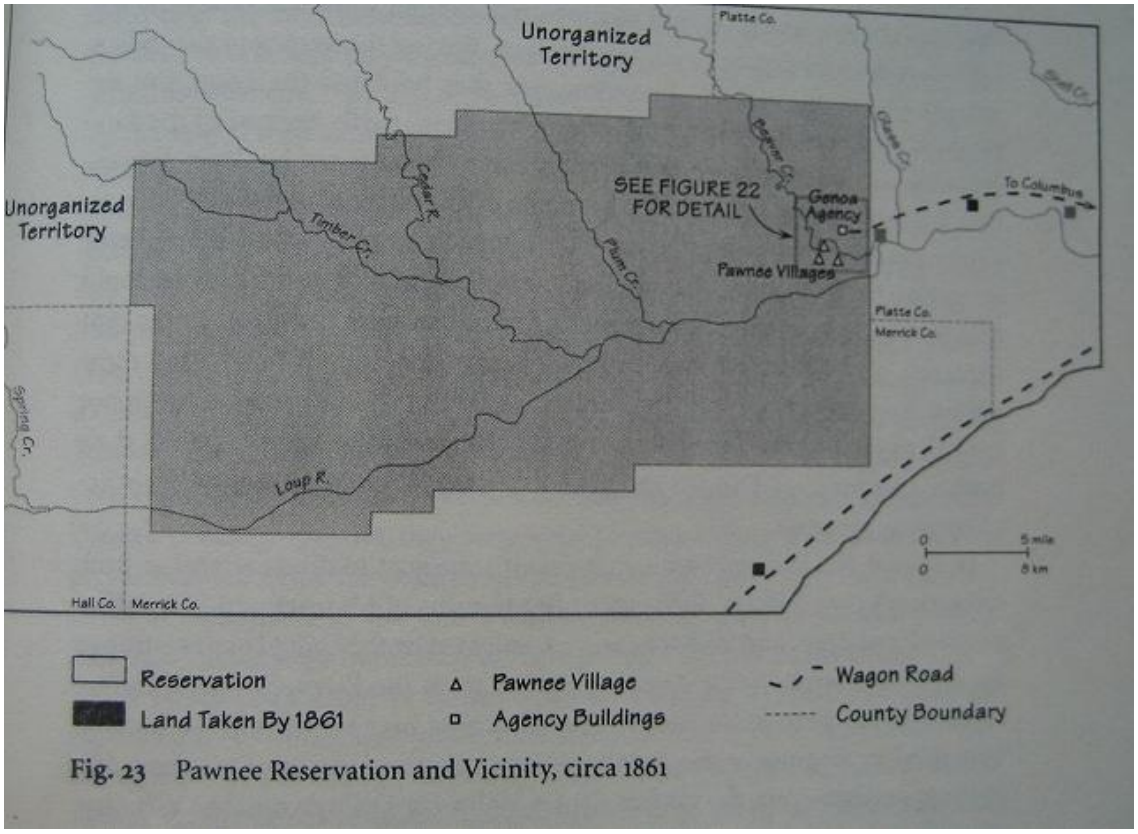

Fig. 23 Pawnee Reservation and Vicinity, circa 1861

Fig. 23　ポウニー族の保護居留区　1861 年頃

10 月の末までしか逗留していなかったのだ。[63]　これが政府による精一杯の保護であったのだ。

こうした耐えない襲撃に対する恐怖の思いと、周囲を囲まれているという感覚が、ポウニー族たちの活力を失わせ、そして、極貧状態に追いやっていた。女達は畑にでて働いたり、或いは、根株を探して歩きまわったりするのを恐れていたし、ダコタ族は草原を焼き払い、バイソンを追い払うなどして、彼らの狩をひそかに妨害していた。自然さえもポウニー族に対して、共同して悪さをしているように思えた。1860 年には、からからに乾燥したために、種まきされた極僅かの穀物が殆ど破壊されてしまった。そして、その次の冬の深刻な状態は、馬の死を告げる鐘の音が重く鳴り響いた。1861 年に DePuy がポウニー族の保護居留区に到着したときには、ポウニー族は“全くの飢餓状態”に陥っており、その保護居留区を放棄し、東のミズーリのほうに退却しようと考えていた。[64] 勿論、この目論見は許されるものではなく、如何なる状況といえども、それは、取り囲まれたポウニー族にどんな平和ももたらすことはなかった。

そして、定住しようとしない状況もまた、インディアン行政官のポウニー族の状況を“良くしよう”という努力を無駄なものにしていた。ダコタ族による襲撃のために作業は遅れはしたが、製材所と粉引き小屋の修繕が実施され、行政官とインディアンたちの村や、

Loup 川に接するように茂っているポプラの木々とを結ぶように、Beaver Creek には橋がかけられた。しかしながら、農業の振興のための施策は何もなされず、これは、1 つには、危険があったからだが、一方では、ポウニー族の男達が、“指導は受けながらも土地を耕作しようという気持ちが殆どなかった”[65] ためである。1857 年の協約のなかの手作業の訓練学校は何もなされずに残っていた。行政官は繰り返し軍による保護をもとめ、そして、実現はしなかったが、ポウニー族が、自分たちで安全が確保できるように鉄砲と弾薬の支給を依頼していた。1861 年の補償物資のなかに、いくらかの弾薬と武器が支給され、Gills は“四つの部族のなかから最も信頼の置ける勇敢な男達 6 人”からなる警察部隊を組織した。[66] しかしながら、之だけの組織では、ポウニー族が彼等の衣類や食料を得たり、行政官がインディアン達の文化の変容を推進する計画を実行するために必要とされる安全を確保したりするには十分とは言えなかった。

こうした見方からすると、ダコタ族は行政官自身の失策を紛らすには格好の言い逃れ材料であった。Gills は、彼がピッツバーグを訪問し、かれの簡素な事務所に 5 ヶ月滞在し、1862 年には、ポウニー族の基金から金を引き出したということで、ネブラス地区の合衆国上院議員により嫌疑をかけられた。DePuy は、かなり正直者のように思われていた、がしかし、(多分、このために) 彼は、彼の時間を随分費やすことになった代理人のところでの厄介な議論に巻き込まれることとなった。彼の主要な対立者は、貿易商人の James Hollis(DePuy の言によれば、“誠に口うるさい、喧嘩っ早い、そして、実にむかつくような男”)と、Lester Platt、彼は、むっとするような以前の行政官の使用人の 1 人と一緒になり、保護居留区の周りを、まるで“猛禽のように”うろついていた男、であった。[67] 彼等は、DePuy のことをののしり、彼が、ポウニー族が彼らの毛布や年金を担保に金を借りるのを防いでいたので、裁判所に訴えでた。DePuy は、説得する資料を準備したが、しかし、今度は彼に対する不平が公式な嫌疑となり、これが結局、1862 年の春に、彼は免職されるという結果になった。

ポウニー族の存続の様式、ネブラスカにおけるまことに悲しい生き残りの姿は、こうした実に悩み多い早期の段階で確立された：政府の彼等に必要な鉄砲、あるいは、防護の手段を提供することに対する政府の意図的な拒否、堕落した、あるいは、あまり熱心でない行政官による取り締まりの強化や、Brule や Oglala Dakota による際限のない襲撃、貿易商人たちの巧みなごまかし、また自分たちの資産、とりわけ土地を求める入植者達、さらには、毎年繰り返す穀物の凶作、そして、人口の減少といった状況下での結果であった。この状況は、Manypenny が、インディアン達の保護居留区として準備されるべきものと望みを抱いたような、彼等を育てていくような環境からはほど遠い悲しい現実であった。

Expulsion to the West

西部への追放

ポンカ族は、ネブラスカ東部のインディアン達の間では、保護居留区に最後に定住し

た部族であったが、しかしながら、彼らは、生活環境は誠に不適切で、かつ、危険をさらけ出した土地を与えられており、とても、“定住”する場所と呼べるような所ではなかった。彼等の問題は、オマハ族が、そこはポンカ族が先祖代々の土地だと主張していたネブラスカの北西部の土地(fig. 13)を売却した 1854 年に始まった。とりわけ、ポンカ族は、Aoyway Creek と Niobrara 川に挟まれた土地は、オマハ族の売ることの出来るような場所ではないし、それは、彼等の仲間が“落ちぶれ”、やがて、“皆殺しにあう”、前触れであると主張した。[68]　1857 年までに、移住して来た者達は Niobrara にある集落へと続く崖沿いの幌馬車の道を辿ってこの売却された土地に移ってきて、まさに、ポンカ族のトウモロコシ農場を開拓した。

その時と同じくして、少なくとも、当時、3,800 人が、その中の 800 人は戦士たちであったが、居たと思われる Brule 族が、彼等の狩猟地域の一部を奪っていたポンカ族の周辺に非常警戒線を張って、White River のほうから圧力をかけて下ってきていた。[69]　こうした圧力があったので、ポンカ族は、Hubdon（Fish-Smell）村を放棄し、Niobrara 川河口近くの彼等になじみの、別の土地に集まっていた。それでも、多くの入植者達が Niobrara 川の近くに定住をしていた。飢餓状態にあったインディアン達は、かれらが侵入者とみなしていた入植者達のトウモロコシや牛を盗み、これで緊張状態に陥った。ある入植者達は、このポンカ族の窮地の状況に理解を示したが、しかし、かれらは、1857 年に世の中の経済が破滅状態になると、自分たち自身の立場が危険な状態になったので恐怖心を持ち始めた。そして、彼らは、インディアンの行政官に対して、ポンカ族を彼等の町から追放する手段を講じないと“重大な衝突事件”が、直ぐでも起こると警告を発して、蓄積された不満の思いを露にし出した。[70]

一方、ポンカ族のほうも、行政官に対して行動をとるように求めた。1855 年から、彼等は繰り返し、彼等の保護居留区と年金に対する見返りとして、彼等の土地を売却することを望んでいるという態度を表明していた。たとえば、1857 年の 6 月 16 日に、Alexander Redfield は、かれがミズーリ川の上流地域を治める行政官として着任する途中 Niobrara 川河口の近くでポンカ族の大きな集団と遭遇した。The Drum（“美男子”の意味）に率いられたこのポンカ族の一団は、オマハ族が彼等の土地を売ったこと、そして、そこに、アメリカ人の入植者達が入ってきたことを苦々しく思っていると苦情を言った。そして、自分たち以外のネブラスカのインディアンたちは、ことごとく年金をもらっているが、自分たちも彼等とおなじような取り扱いをしてほしいと主張した。そして、次の年の秋には、John Robertson、彼は、オマハ族の行政官であったが、（そして、ポンカ族に対しても責任の在る立場の人の代理人であった）彼が、協定に関する代表団を Washington, D.C. に派遣するポンカ族を招待するために Niobrara に送り込まれた。そこで、Robertson は、その旅を実行する“指導的な男達”6 人；The Whip, Strong Walker, Lone Chief, Threatening Clouds, Standing Buffalo そして、混血の Michael Cerre を選抜した。二番目に実力を持っていた The Drum 酋長は、残りの者達を統括するためにこれには加わら

ず、居留地に残った。派遣団の一行は 1857 年の 12 月の遅く、首都に到達した。[71]

12 月の 29 日と 1 月の 5 日に引き続き開かれた統治官の Charles Mix との会議では、統治官は(インディアン達にはとても滑稽に思われるような言葉で) 実に熱心に夫々の項目について議論をしたが、彼は、妥協の余地を寸分も示さなかった。[72] 最初の会議は、合意を得るためのものではなかったが、見た目はかなり和やかなもので、Mix は、アメリカの考えを提示することに躊躇はなかった。彼は、ポンカ族のリーダーに対して、今は、彼等の立場における、“急激な変化にたいして決断を下す”時であると話した。そして、彼らは、いまや、狩猟をあきらめ、一つの村に集合して、農業に専念しなければならないと説得された。Mix は、彼らに対して、彼が彼等のことを“子供たち”とみなしている理由は、彼らが、自分たちの“安全を確保し、導き、そして、指導的な立場にある”父の存在を必要としているからであると断言した。この講和のあと、みんなが握手を交わし、インディアン達は自分たちの宿に帰っていった。

その後の五日間の行事のなかで、ポンカ族の派遣団は、彼等が望んでいた土地の代償としての提案の詳細を提示した。彼らはまず、Aoyway Creek のミズーリ地点から White 川ならびに Black Hills の西部地域まで拡大された土地の領有権をさだめたが、彼らと統治官の両方が了解したこの拡張の主張は、オマハ族や、ダコタ族の主張するところでもあった。この土地の売却の見返りとして、かれらは、最初の年に 40,000 ドルの年金の支払いを求め、その半分は現金で支払われること、そして、永久年金として毎年、30,000 ドルが、半分はやはり現金で支払われるべきことを要求した。さらに、かれらは、製材小屋、鍛冶屋、手工芸の訓練所の撤去のための費用、さらに、彼等の混血に対する“好意的な支給”として、30,000 ドルの支払いを求めた。明らかに、ポンカ族の酋長達は、彼等のこうした支給がその後に合意したポウニー族に対する協定のモデルになったので、彼等の課題となっていたものを実現したものであった。

The Whip は、1 月の会議で Mix に請願書を手渡した。長官は、こうしてビジネス的な提案に対して賞賛をしたが、しかし、彼らの広範な領土の主張の正当性について問いただしていた。The Whip は、この土地は、彼らが“白人の同胞”が、“偉大なる川”を渡ってくる以前に“偉大なる精霊”によりポンカ族に与えられたものであると怒りをこめて返答した。しかし、この“偉大なる精霊”はアメリカ人に対して、より強力な武力を与えたことも、彼は認めていた：彼は、インディアン達の“日用の生活用品”が沢山展示されている博物館を訪問し、それが彼を悲嘆させ、そして、“深く考え込ませて”しまった。さらに彼は、ポンカ族はこれまで合衆国から何も与えられていないし、彼の部族のものは今まで、アメリカ人に対して決して、“弾薬のつまった弾を撃った”ことなどないと考えていた。しかし、いま、かれらは自分たちの土地を売ろうという“広大な考え”をもっていた。そして、彼らは、“そのビジネス”のためにここに来ていたのだ。Strong Walker と Cerre は、同じような怒りと誇りを沢山盛り込んだ The Whip のメッセージを繰り返して主張しながら、さらに話しを続けた。

Max の返事は、簡潔で明確なものであった。たしかに、白人は海を渡ってここに来た、がけれども、それはすでにもう二百年も昔のことであった。しかしながら、彼が主張したのは、アメリカ人は、彼等、インディアンが、お互いに争っているようなこと以上にインディアンに対して悪いことをしてきたわけではないということであった。彼は、彼等の広大な土地の所有の主張を認めたくなかったのであろう。彼は、Aoyway Creek と Niobrara の間の土地がすでに政府の管轄下にあり、そして、Brule 族もまた、Niobrara 川と White 川に挟まれた地域の領有権を主張しているときにどのようにこれを解決できるのかということを聞き返していた。Mix は、また、ポンカ族は、ミズーリ川の近く、そこは、あまりにも入植者達に近く、そして、伝染病のはやっているところでもあり、そこには保護居留区を持つことは出来ないと主張した。そして最後に、彼は不機嫌な態度を示しながら、The Whip が首に下げていたメダルを示し、ポンカ族がこれまで合衆国から何も受け取ってはいないという主張をあざけった。

いまや、屈辱をうけ、そして、悲嘆にくれた The Whip は、長官とともに Ponka Creek と Niobrara の間のミズーリの州境にある彼等の先祖伝来の故郷からは動かさないことを嘆願した。彼のメダルに関して、彼は、これは Benjamin O'Fallon に、数年前に彼の友人の証として贈られたものであると説明した。しかし、インディアンの願いと主張は結局無駄に帰した。1858 年の 3 月 12 日に協約が締結したときに、ポンカ族は彼らが要請した支払いのうちの極僅かのものを受け取ったに過ぎなかった。（table 6）彼らは Ponka Creek から彼等の将来の保護居留区として定められた広い荒野の土地に移動するために一年の猶予が与えられた。

派遣団がワシントンに滞在している間に、Niobrara における状況が俄かに険悪化した。[73] ポンカ族、或いは、彼等の部族の大半の者達がその冬は街のなかでキャンプをしていた。しかし、彼らは食料が殆ど尽きていた。彼らが毎年耕していた谷間の平野はすでに入植者達により占領されていたのだ。この土地は、土を耕すのが容易で、長年の世話のおかげで、溢れるばかりの収穫があり、実に肥沃であった。ポンカ族は、新しい草原の土地を開墾し、そこに食物を栽培するための道具を持っていなかった。そんな状況で酋長は、若い男達が暴走するのを抑えることができなかったのだ。この緊張は、戦士たちの集団が街の製材小屋と粉引き小屋を襲撃し、機械を破壊し、食料を盗んだ、1 月の 11 日に最高に達した。騎兵隊が Fort Randall から、命令を受けて派遣された。一方、Brule 族は、ポンカ族が合衆国政府と協約を結んでいたことを知っていた。そして、彼らは、協約の裏切り行為をしていた他のインディアン達、つまり、オマハ族やポウニー族と一緒になって、ポンカ族を追放するという態度を示した。

1858 年の 4 月に特別行政官の J.Shaw Gregory が報酬を受け取るために Niobrara に到着した。彼の最初の行動はポンカ族を Niobrara から Ponca Creek に移動させるというものであった。彼はもう 1 人のオマハ族の行政官である William Wilson に、ここは、ポンカ族が、何年か平穏に過ごしてきた、50 近くの小屋がある場所(ここは、Hubdon 村か、

その近くであった） に近いところだと説明した。土地の調査官達が 1858 年の一年を通して作業をしていた時に、かれらは、村を Ponca Creek の河口の丁度南に当たるところにある崖と沼地との間に村を作った。（ fig. 24 ） Gregory は、移動がすんだあと、略奪や、無断の居住者、そして、ウィスキーもないと主張した。彼の施策の多くがうまくいったのは、彼が、“直ぐに部族に対し妥当な報酬”で、任命した 20 人の勇士からなる警察の力によるものであると主張していた。[74]

ポンカ族は、ポウニー族に守られて夏の狩に出かけたが、しかし、獲物の肉は殆ど見つからず、さらに、トウモロコシの収穫もうまく行かなかった。彼等は、1858 – 59 年の秋から冬を小麦粉 500 袋、180 ポンドの肉、100 袋の砂糖、62 袋のコーヒー、そして、Gregory が St. Johns や Sioux City から苦労の末やっと手に入れた 1,000 ブッシェルのトウモロコシで何とか飢えを凌いでいた。[75] この間の殆どを、Medicine Cup と White Black Bird の指揮のもとに 100 ほどの小屋で過ごした。―Brule 族は、丁度、恐ろしい嵐にように、襲撃の機会を伺いながら Ponca Creek に 40 ﾏｲﾙのところで構えていた。

1859 年の夏は、ポンカ族を危機的な状況に陥れた。彼らは Elkhorn 川の周辺に狩に行く前に、トウモロコシを“耕作できる土地”に、植えていた。Gregory は、Brule 族が居るので、Niobrara の北側には狩に行かないように注意をしていた。しかし、Brule 族(そして、多分、一部のシャイアン族 ） が、”圧倒的に強烈な武力”で、7 月の 28 日に彼等のキャンプを襲撃し、部族のなかの三番の実力者である Shu-kah-bi(Heavy Chief)を殺害し、そのほか、13 人者部族の者を殺し、子供たちを捕虜として連れ去っていった。殆ど全部と言ってよいほど、ポンカ族の部落のティビーは破壊され、馬は盗まれてしまい、食物は焼き払われてしまった。その上、Brule 族は、彼らのモカシンをずたずたに引き裂くことまでしていた。ポンカ族に残されたものといえば、馬は殆どなく、四丁の鉄砲だけで、弾薬は何もなかった。Gregory は、ポンカ族を守るために、二個大隊の騎兵隊と、1.000 ドルに相当する食糧、鉄砲、弾薬の支援を要請したが、しかし、この彼の要請は、聞き入れようとしない耳に届いただけだった。[76]

ポンカ族は、苦しみながらも Ponca Creek に近い村に引き下がり、そして直ちに議会に申し入れをした。The Whip は Gregory に彼の親族を殺した血のついた矢を渡した。彼は、若者達が弱腰であると彼を嘲ったときでさえ、協約を守りぬいた男だといって、Shu-kah-bi の死を嘆き悲しんだ。Brule 族もまた、ポンカ族のことを“偉大なる父”の言うことに耳を傾ける女どもだといって嘲っていた。彼が知りたかったのは、彼等、つまり、ポンカ族がもらわないときに、何故、Dakota 族は銃を支給されたのかということであった。

うんざりして、彼はそれ以来、 Mix が Washington. D.C.に訪れたときに彼に上げたメダルを首にかけまいと心に誓った。後に彼は、自分は、戦士としていき、そして、名誉ある死を選びたかったと断言していた。[77]

1859 年の 9 月 1 日に、Brule 族が再び襲撃を加え、この時には、村を襲い、そして、ポ

ンカ族は Niobrara まで逃げた。彼らは、街の西側に直ぐ近い、Missouri 川と Niobrara 川の間の地域にキャンプを張った。街の住宅街の外にいた入植者達もまた、Niobrara に非難した。Gregory は、Mix に対して、ポンカ族は 5 週間くらいしか持たないだろう、そして、彼等は、今全滅の危機に曝されて居ると警告した。かれらの年金による基金は、いまだ、議会から適正といえるほどのものは与えられておらず、(すでに協定で合意してから 18 か月も丸々経過していたにもかかわらず) インディアン達は、また、極僅かの配給、ーすなわち、4,000 ポンドの豚肉、4,000 ボンドの小麦粉、そして、4,000 ポンドの乾パン—が、Fort Randall から運び込まれ、これに頼って飢えを凌いでいた。こうした緊急の危険状態にもかかわらず、Gregory は、Niobrara の状況はインディアンが街頭で銃弾を浴びた場所といわれるまでに治安が悪化していたので、Ponca 族に対して冬の狩に出かけるよう忠告しようと必死になっていた。[78]

ポンカ族の気持ちがいらだち、そして、飢えを凌いでいる間に、1858 年の協定のなかに定められてものに従い、新しい保護居留区の土地の調査がどんどん進んでいた。

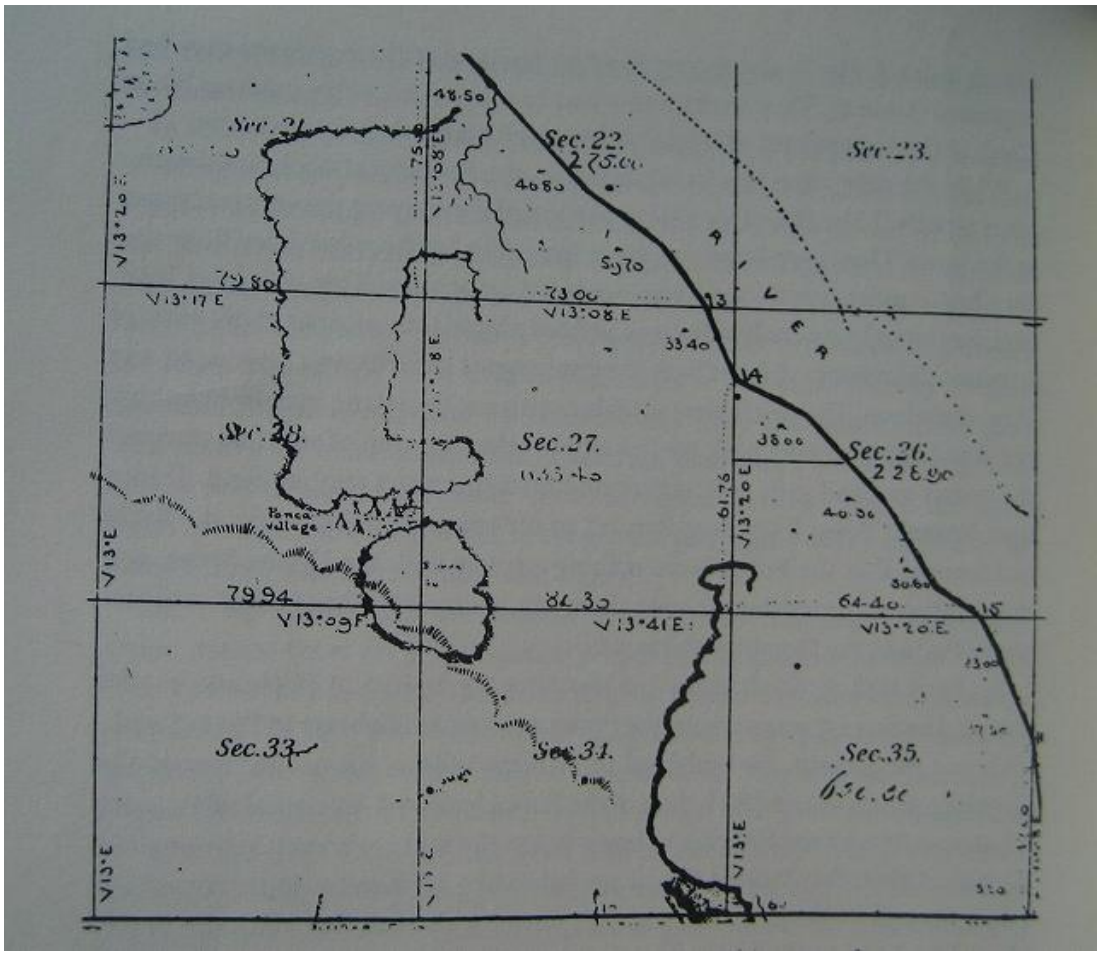

Fig. 24　ポンカ族の村　　1858 年　最初の土地調査から。　北 33 番、西 7 番領域の 6 回目の基礎測量

Nebraska State　Historical Society の好意による。

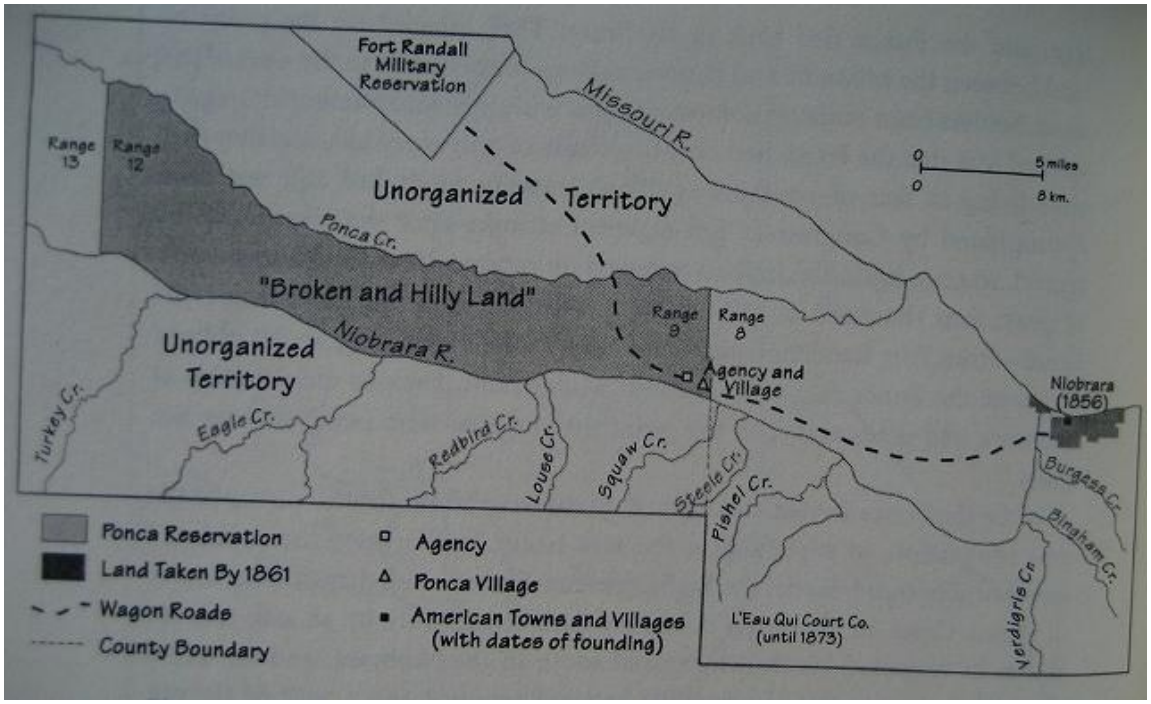

Fig. 25　ポンカ族の保護居留区　1861 年頃

1859 年の５月に、指名された指揮官である Thomas J. Stone が、Ponca Creek から、ただ、6 インチ程度の太さの樫の木で見分けの付けられた西側の境界線にかけて 25 ﾏｲﾙほどの取り巻いたライン引いた。そして、彼は、Niobrara の南側を測量し、川から、6 番目の基準線の西、8 ならびに 9 番目の地域にはさまれる地域に 10 ﾏｲﾙほどの線を引いた。受け取った Stone の報告書により、Gregory は、提案された保護居留区は、“十分な樹木も茂っていないし、また、彼等が自給できるほどの場所となるほど土地は肥沃ではなく、ここは、総合的に考えるとインディアン達が生活するには適していない”と、決断した。その上さらに、彼は、その場所はポンカ族が望んでいた土地から 12 ﾏｲﾙも川を遡ったところであると付け加えていた。しかし、第 9 領域の東のほうは、アメリカ人入植者達がこの土地を使うという調査を済ませていたので、彼は、インディアン達を新しい土地に移動させるとする以外に選択肢はないと認識していた。希望的にと彼が Robinson に進言したように、おそらく、将来、補完的に結ばれる協定では、その位置を変更し、ポンカ族に対して、彼等が望んでいるミズーリ川にもっと近い場所に保護居留区を与えるようになるだろうと考えていた。[79]

ポンカ族のほうは、それ以後もやはり、もっと西の方に移住しようという努力を続けていた。“われわれは、決して、そこの場所に行きたいというのではない”と、Hard Walker は、1860 年の２月３日に催された会議で Gregory に告げていた。“川の辺の故郷で死のうではないか”と、The Whip は、嘆願していた。[80]　若いポンカ族の戦士たちは、5 月に、

土地の測量チームが離れるのを阻止しようとさえしていて、Fort Randall からの騎兵隊が、法と命令を執行するために呼ばれた。その罰として、4 人の戦士が警察により追放された。[81] インディアン局は、最初の計画からのいささかの逸脱も認めようとはしなかった。そして、1860 年の秋には、Gregory は、気乗りのしないポンカ族を彼等の新しい居住地に移動させた。彼等ははるか東の果ての地に村を築いたというのが、彼等の苦悩の思いの表れである。(fig.25)

他のネブラスカのインディアン達とちがい、ポンカ族はとても貧相な保護居留区を手にすることとなった。土地の大半は荒涼とした荒地で、彼等が馬を飼育するほどの野生の草は生えておらず、肥沃な土地は僅か川のそばの狭い台地にしかなかった。渓谷にさえ、殆ど樹木は生えておらず、インディアン達の薪を、Niobrara 川が凍りついたときにそこに行き、根を掘り起こして集めてこなければならなかった。保護居留区はまたかなり遠隔の離れたところにあった。Niobrara の街に行くには、20 ﾏｲﾙほどもあり、街に行くには、川を渡っていかなければならなかった。(fig.25 ならびに 26) また、Fort Randall に行くには、Ponca Creek を横切るなど、32 ﾏｲﾙもの、険しい街道を行かなければならなかった。年間の支給物資は、Fort Randall から牛車で運ばれてくるか、或いは、Niobrara 川の河口の北にあった陸揚げ基地で配給された。この陸揚げ地には、建物は建っておらず、品物は野外に野ざらしにされた。[82] 保護居留区の良かったことといえば、それは Dakota 族に対してだけだった。

しかし、なお、1860 年 11 月に、Gregory は、楽観的にポンカ族の将来は明るい見通しだと報告していた。Brule 族の代表のものが、行政官のところに来て、ポンカ族にたい

Fig. 26　ポンカ行政官の Hoffman の地図、　1812 年
General Map Files,　National Archives, RG 75, No. 380 - 81

し、彼らは、今は、オマハ族やポウニー族の襲撃に忙しくて、彼らを悩ますどころではないと、ポンカ族に対しては寛大なところを示していた。[83]　しかし、平和を期待するのは間違っていた。11 月の 29 日になり、ダコタ族の小さな集団が、その殆どはサンテー族の者達であったが、どこからともなく保護居留区を襲ってきて、ポンカ族と行政官の所有していた馬を全部さらっていってしまった。ポンカ族は活気のない別の会合に集合した。Lone Chief が、一体何処が安全を約束された場所なのか？　と問いただした。自分たちに残された僅か 20 頭足らずの馬でどうやって狩ができるんだ？　彼は続けて、にもかかわらず、自分たちはこの保護居留区で飢えて死ぬより、“戦士として草原で死んだほうがまだましだ”と、言って、彼等は実際に狩に出かけるだろう、といった。[84]　こうして、彼等は冬の狩に出かけたが、しかし、惨めさを味わう以外に何の収穫もなかった。そして、1 月までに彼らは Niobrara の町の彼等の村まで帰ってきた。

戦闘による破壊と保護居留区における貧困のために、行政官が機能を発揮するのは非常にゆっくりしていた。Gregory は、Niobrara に着任したが、1861 年の 6 月 1 日に、Joshua Hoffman と代わるまでに行政官としての仕事の改善を殆どしなかった。Hoffman が、彼の家族と一緒にここに到着したときに、彼は、使い物にならない製材機と壊れた粉引き機、そして、おもに貯蔵小屋として使われていた 2 軒のポプラの木で作られた小屋を見つけただけだった。（fig.26）一方の小屋の屋根裏部屋は、この不運な行政官の使用人のための寝床として使われた。Hoffman は、ここは“独り者の集団”が住むところだといって、支部に不平を述べ、妻と子供を Fort Randall に送り返した。1860 年には、60 ｴｰｶｰの土地が荒らされていたが、鍬が足りなくて耕すことが出来ず、開墾する準備が出来ない状態であった。[85]

Hoffman は、ポンカ族に、丁度彼等が最初の補償品を受けとったあと、7 月には保護居留区に戻るように要請した。恒例の“必要な品物”の支払いが済んだ後、ポンカ族は、現金で$6,999 の金、これは一人当たりにして$7 であったのだが、これを持って去っていった。彼らは、ダコタ族に対する恐怖があったので、“まさしく不承不承ながらも”、保護居留区に戻った。彼等はそこに到着すると、彼らの農地に食物を植えるために行政官の居る場所から僅か、半ﾏｲﾙも離れたところにさえ行くこと拒んでいたが、たまに彼らは、ダコタ族が待ち伏せしている崖の近くまで行くことがあった。Hoffman は、ポンカ族の警察力を強化し、彼等に丹精な服装をさせたが、しかし、これは、ポンカ族を“より直接的に彼のもとに管轄する”ということ以外に、効果的な防衛手段とはならなかった。[86]

1861 年には、ほんの僅かのトウモロコシの土地に苗が植えられ、20 ｴｰｶｰほどの行政官の管轄地が耕されたが、しかし、この年には雨が全く降らず、穀物は大地に枯れ死んでしまった。インディアン達は、この貧相な土地で生き伸びることが困難であったが、それでも彼らは、恐怖のために夏の狩に出かけることが出来なかった。彼が所有していた馬は、三人の戦士に一頭という程度であった；たとえ彼等が襲われていない獲物の群を見つけたにしても、首尾よく狩をして沢山の肉を保護居留区に持ち帰ることはできなかっただろう。

Hoffman は、(よくよく何気ない振りをして) 彼等の恐怖を取り除き、彼等を南西部の Elkhorn 川のほうに送り出した。しかし、彼等は 保護居留区から 50 ﾏｲﾙも行かずうちに、飢えて、そして、疲れ果てて戻って来た。こうして、ポンカ族は、その秋、ある者はオマハ族と、そして、他の者達はポウニー族と一緒に生活するために散り散りになっていった。行政官のところに残った人たちは、干ばつを生き延びるためにトウモロコシの鞘を焼いて食べ、そして、野生のプラムやカブを頼りに生きていた。さらに彼等は、わが身の安全のために、直ぐに必要になるものさえ犠牲にし、食料を得るために毛布や補償で支給されたものを売り払っていた。

このようなおぞましい生活の状況を、ポンカ族の人口が増加し、しかも、それが真相のごとく思われることを示す統計(fig. 8) と一致させてみることは難しい。Gregory も、そして、Hoffman もまた、彼等が、年金の目録を作るときに、最も信頼の置ける人口の数を掴んでいた。[87] 1861 年には、たとえば、帳簿には、973 人のポンカ族の名前が書かれていて、その中の 428 人は男性、そして、545 人が女性であった。この帳簿によれば、夫々に酋長がいる 6 つの血族集団にわかれて組織されていた。The Whip が、最も重要な酋長として位置していて、全体を指揮している指導者で、The Drum の名前は、彼が 1857 年の Redfield での会合の時以来、死んでいたことを示しているかのごとく、この帳簿の何処にも見られなかった。この目録のなかの多くの名前から、彼等が混血で、そして、ポンカ族の人口を少しでも支払いを沢山得ようと、親戚のものを取り込んで膨らませていた可能性がある。理由がどうであれ、ポンカ族は新しく、そして、より沢山の公式的な人口となっていたが、結局その新しい人口から、これ以後は次第に減り続けていった。